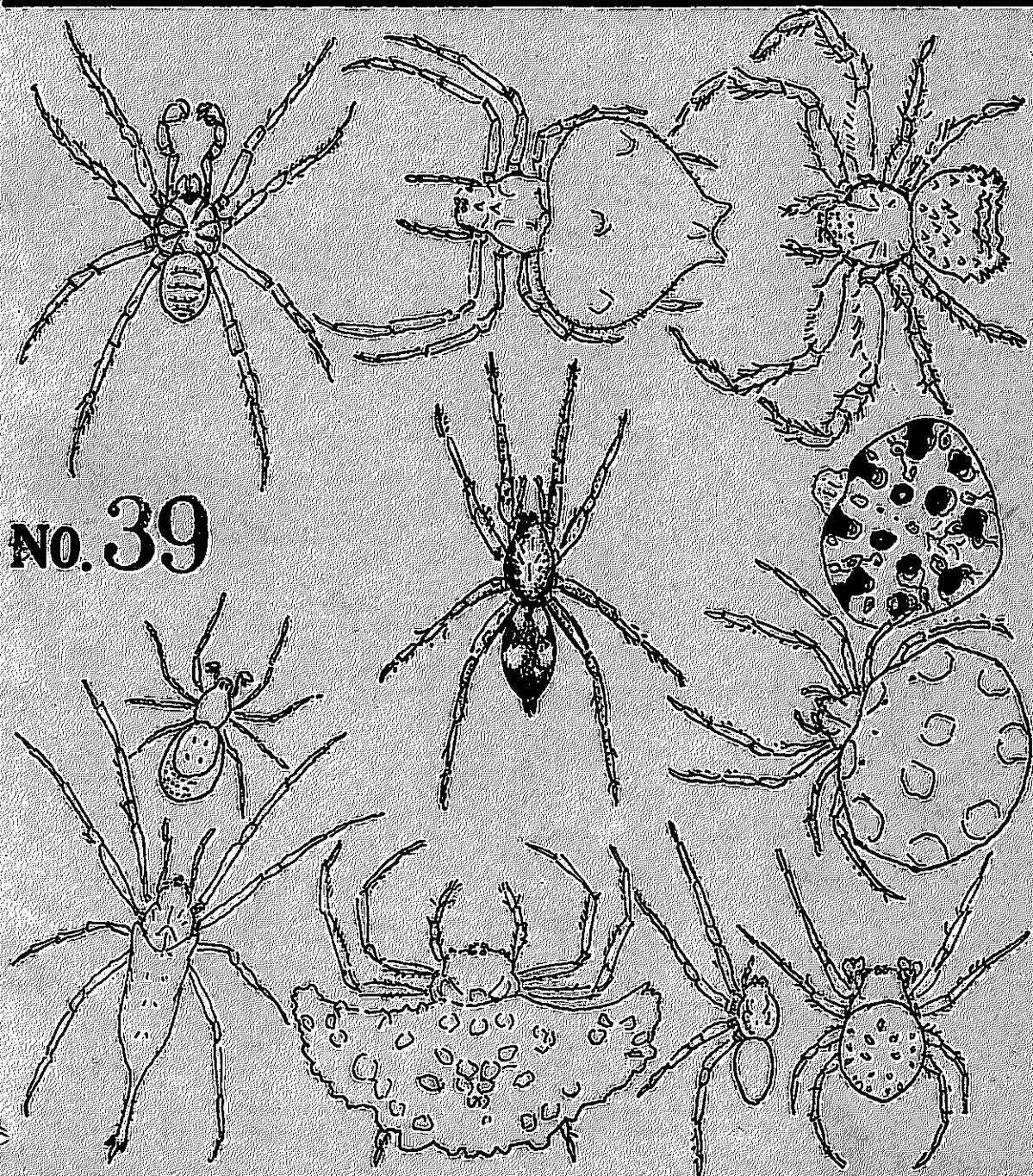


東京蜘蛛談話会会誌

KISHIDAIA



No.39

東京蜘蛛談話会 東京都日野市豊田1.896 萱嶋泉方(TEL 0425-81-7128)

目 次

特別寄稿	日本のクモ学の現況と展望	八木沼 健夫	(1)
特 集	1974年クモ学界10大ニュース		(6)
石尊山の真正蜘蛛類	皆沼洋平・闇由美子 沼田貞子・堀越早苗	(9)	
埼玉県のクモ類研究史(1)	太野正男	(15)	
埼玉県における採集記録(1)	鶴田順一	(22)	
ハエトリクモの分類ーその歴史・体系に関する2、3の知見	松本誠治	(27)	
八重山群島のクモ類	大利昌久	(32)	
真正クモ類の生態資料(南西諸島編)	大利昌久	(33)	
キシノウエトタテクモに寄生する冬虫夏草について	高橋登	(36)	
小観察あれこれ(4)	高野伸二	(38)	
箱根畠宿付近の真正蜘蛛類	小林久俊・石山俊幸・梅田重雄	(42)	
クモの生活史研究における問題及び齢期記録の一方法	小野展嗣	(49)	
DRAGLINE.	カクレ帯をつけたヤマオニクモの幼生	松本誠治	(40)
	家屋の壁をあるきまわるオオハエトリ	"	(40)
	八王子城跡クモ観察会のドゥシグモ	小野展嗣	(40)
	アリをさらうクモと好むクモ	"	(41)
	オオヒメグモのえじきとなったクモ	"	(41)
訂正とお詫び			(8)
土壤動物研究会へのお誘い			(21)
お便りの中から			(51)
KISHIDATA 640 原稿募集			(48)
会 報			(55)

昨年8月、東京八王子で開催された東亜蜘蛛学会の大会は、2日間にわたるという学会初まって以来の盛況となった。これはとりもなおさず日本のクモ学界のゆるぎない発展を示すものであろう。また一方では、日本のクモ学は転換期にきているとも言われている。クモ愛好会として独自の道を開拓しつつ日本のクモ学発展に寄与していくこうと考える我談話会にとっても、その活動を一度見直すべき時期にきているのではないか。

大会当日、学会会長であられる八木沼健夫博士の「日本のクモ学の現状と展望」と題する講演は、その問題点を端的に我々に伝えるものであったが、時間の都合でそのわずかの部分しか聴くことができなかった。残念に思ったのは私一人ではなかったと思う。折りしも原稿不足の本誌にその未講演に終った部分を掲載することができれば、談話会員へのよき刺激となり、また大会に出席されなかつた方々にも有益であると考え、先生に特にお願いしたところ新年早々に原稿が届き、ここに念願かなつて再びお話を伺うことができるはこびとなつた。これが我々に必ずや何か有益な示唆を与えてくれるものと信じている。

執筆を快くお引受け下さった八木沼先生に心から御礼申し上げる次第である。 (編集者)

特別寄稿

日本のクモ学の現況と展望

八木沼 健夫

昭和49年8月におこなわれた東亜蜘蛛学会第6回大会において「日本のクモ学の現状と展望」と題して、1時間ほどの講演を予定したが、時間の都合でかなりの部分を省略した。今回東京蜘蛛談話会からその省いた部分を書いてほしいとの依頼を受けたので、そのうち分類に関するところについて書かせていただく。その他の部分は拙著「クモの観察と研究」に述べてあるのであわせてご覧いただきたい。これから述べることは談話会の会員にとっては欣迎に説法になるかも知れないが、これから始めようとする方もおられると思うので、そういう人たちのために何かご参考になれば幸である。会員でない私に紙面を提供して下さった談話会に対してお礼申し上げる。

これまで採集して専門家に同定を依頼するという態度が多かったが、自らの手で究めて行こうとする傾向を生じていることは好ましい現象であり、我が国のクモ分類学の進歩である。以下主な点について、私の意見を加えて述べてみたいと思う。

1 全体から分化へ

外国では早くから研究対象が科属などの単位に分化し、それぞれに専門家がいるが、日本にはこのようなことは見られなかった。しかし最近になって熱心な研究家が続出し、これまでに貯えた力と知識を駆使して分化的に研究しようというきざしが見えて来たことは喜ばしいことである。もちろん現

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

状では多くの部分において歐米に比べてはるかに立ちおくれていて、ようやくその緒についたばかりの感はあるが、彼らの水準に近づく日もそう遠くはあるまい。すでに研究が開始されているグループとしては、サラグモ科・コサラグモ科・ホラヒメグモ科・マシラグモ科・ナミハグモ群・ヤチグモ属・ヒラタグモ科・アシナガグモ科・コモリグモ科・ハエトリグモ科・カニグモ科などがあり、わが国のクモ分類学の見通しは明かるいが、さらに多くの専門家が出てほしいものである。

分化的な研究に際して注意を要することは単にそのグループの名をよく知るというのではなく、クモ全体を眺めた基礎に立つことである。研究対象以外のものでもおもなものはだいたい同定できる能力を持つとともに、クモならびに動物分類学の知識を持っていることがたいせつである。最初からせまい分野に首をつっこむと、やがて動きがとれなくなる。深い穴を掘るためにには大きい間口が必要であり、高い山を築くには広い地盤が必要である。

2 種の検討

同定されたまま和名と学名をおぼえてきたというこれまでの態度から、はたして正しく科や属の位置づけがなされているか、他種との混同はないか、学名はそれで適切か、別種と考えられてきたものはそのまま別種でよいのか……などと種を深く見究め正しく認識しようとする傾向を生じてきたのは一つの前進である。大会の発表にあった田中穂積氏のコモリグモ、千国安之輔氏や松本誠治氏のハエトリグモ、西川喜朗氏のヤチグモなどそのよい例である。単にアマチュア趣味的に微細な点のみにとらわれず、さらに系統的に、生物地理学的に考察しようとする態度もあらわれてきた。

次に老婆心ながら種の検討に対する注意事項を述べておく。

(1) 深くやればやるほど小さいちがいに目がついで気になってしまたがない。これはたいせつなことであるが全体をよく見渡し、他の標徴をも十分考え合わさなければ、いつしか極端なスプリッターにおち入ってしまう。身近なものほど小さい差に気のつくもので、家族→他人→他の人種→他の動物と遠くなるほど個体間の差がはっきりしなくなるのと同じである。

(2) その差は種的なのかどうか、つまり種内変化か種間変異なのか、分類学には常につきまと問題である。すべてについて生殖隔離があるかどうかを見究めることはできないから、つとめて多くの個体に接するように努め、その形質が種の標徴的価値を持つものかどうかに対する見解を養いたいものである。

(3) 形態のみでなく生態も考慮に入れる。現在の分類学は形態を基盤としているが、生態の面もとり入れようとする傾向になって来たことは喜ばしい。生物の研究は生物の研究であって死物の研究ではない。生きている姿を捕えることが重要である。最近形態的には区別のできないいわゆる同胞種であるコモリグモ科の一一種が求婚の様式がまったく異なっているところから2種に分割された例もある。

生物の進化には平行進化や収斂現象があり、本質的に異なるものが生態的近似を示す場合があるから、生態を取り入れるに際し、このことを十分念頭におくべきである。また共通祖先から出て、形態は分化しているが、生態はそのまま分化せず残っている場合もある。形態の変化は環境の影響を受けることは事実であるが環境とまったく無関係な変化もある。クジラと魚を同類視する弊におち入ら

ぬようにしたい。

3. 新種記載について

今までではわずかな特定の人のみによって新種の記載がなされてきたが、最近若い人達の間で記載しようとする人があらわれだした。新種記載は何も老年たちに独占さるべきものでなく、若い人で大いにやってもらいたいものである。人によっては新種記載は学術発表でなく大きい業績ではないというが、未開拓（何10年もまえからいわれて来たことばだが）の日本ではまだまだ新種が続出するのもやむを得ない。あまりにも名のついていないのが多すぎる。

しかしながら新種記載はかんたんなり見えて、実ははなはだやっかいな仕事である。書くまでの過程がたいせつで、見落しのない文献の探索、種の標徴の確認など大変な仕事である。そのためには十分な材料と文献が必要である。文献探索不十分なために既知種を新種にするおそれがある。また十分な命名規約の理解、ラテン語その他の語学力、そして大きな背景として動物分類の素養が必要である。

とくに難しいのは洞穴種である。洞穴種は洞穴ごとに隔離による変異があり、外国種との共通性もなさそうなので、外国の文献を探索せず、限られた少数の日本の文献だけでかんたんにやれそうに見える。しかし洞穴のものの分類は洞外のものより難しい。A洞のものとB洞のものでは明瞭に区別できても、その差が種内の差か種間の差かの判定が困難である。日本の洞穴種を調べるにはやはり外国のものにもある程度通じていなければならぬ。私もずい分新種候補を持っているが、こわくていまだに書いていない。洞穴のクモでは、その変異が種のレベルに達しているかどうか、小さい地理的変異でないかなどよく研究する必要がある。また洞穴のクモは同種内のいろんな段階の微小変異から→品種→亜種→種の変化があり、またさらにそれらをつなぐ中間的な種々の段階のものが存在する。これを現今の分類のランク種・亜種のみに対応させることはむずかしい。これには相当多くの個体や種を見ることが必要で永年の経験を土台としなければならない。かって田中茂穂博士が魚の命名に4命名・5命名を用いるといわれた意味がよくわかる。私の研究中であるホラヒメグモもランバーの立場をとれば2~3種にしほられるであろうし、スプリッターの立場をとれば数10種にわかる。人によっては属や科までに分けるかも知れない。

〔新種記載の方法と注意〕

命名規約にくわしく書かれているから、おもなことがらだけにとどめる。

- ① 多くの個体（両性）を材料とし、その中から典型的なものを選んで *Holotype* と *Paratype* とする。
- ② 標徴は文のみでなく詳細な図を伴なうことが望ましい。
- ③ 近縁種との比較。もっとも近似したものが必ず日本にいるとは限らない。多くの文献に目を通す必要がある。また「AはBに似るが、外雌器の形や眼の排列で容易に区別できる」式の表現はよろしくない。自分がわかっていて他の人にはわからない。どうちがうかを明記すべきである。（私の過去の文献にも不十分なものがあった）

KISHIDAIA 1639 1975, Mar.

- ④ 学名を人名や地名ばかりでは能がない。やはりラテン語の名もほしい。
- ⑤ タイプ標本の保管場所の明示（なるべく多くの人が利用できるよう、博物館とか学会がのぞみたい）

4. 標徴のとり方注意

種を検討する場合も、新種を書く場合も如何なる標徴に注目すべきかを十分心得ていないと、どんな方向に進んでしまうことがある。今その標徴についてすべてを書くことはできないから、おもなものを2、3述べておこう。

(1) 生殖器官の構造

分類には生殖器官の形態や構造が重視される。これは種族維持のための重要な器官であって、環境の影響をうけにくいくこと、また♀♂何れかが変化すれば key and lock の関係が成立しなくなり、機械的に隔離されてしまうからである。

雄の palp は外形のみでなく、時には KOH 処理をして引きのばして観察することが必要である。外形で区別できなくても、引きのばすとかくれた部分でちがっていることがある。スズキコモリグモとハラクロコモリグモでは外形相似形で区別しにくい。

雌の epigynum は種を区別するのに重要なしかも見易い器官であるが種によっては外形のみで区別の困難なものもある。*Trochosa*, *Pirata*, *Cybaeus*などは外形のみではむずかしい。この場合は epigynum を外して内部構造を KOH 処理して見なければならない。この際薬品処理、煮沸・封入の過程で変形する所以があるから、出来上った1枚のプレバラートを唯一のたよりにすることは危険である。例えば同種のクモのプレバラートを数枚作って比較してみると、みんな少しづつちがって見えることがある。アルテファクトにくれぐれも注意。

(2) 眼の排列・大小

Simon が眼の排列を中心に分類して以来、眼は分類上重視されて来た。しかし眼の排列にも安定した部分と不安定な部分がある。眼のある特徴のみ捕えて種や属を云々することは危険である。

また眼の大小関係も重要ではあるが暗所（リター、洞穴）にすむものでは退化傾向にあるので、絶対的なきめ手とならないことがある。眼の大きさがかわれば眼直径と眼距離の比に変化がおこり、また前中眼または前側眼径と Clypeus の長さとの比にも変化がある。A種は Clypeus < AME で、新しくされたものは Clypeus > AME であるため、これで以てすぐBという新種をつくることははなはだ危険である。多くの個体を検することによってある程度つくられる。

暗所にすむものは前中眼が小さくなる傾向にあり同一 population 中でも、8眼や6眼が見出されることがあるので、この数で以て直ちに種を分けることも危険である。

6眼のヨシアキナミハグモも他の標徴で以て区別しムツメという名を避けた。後にはたして8眼のものがとれた。ウロタナグモもタナグモ科中 6眼という特異な存在であったが後に 8眼のものが見つかっている。アメリカの *Scotolathys* は 6眼なるゆえを以て *Lathys* から分離されていたが、中間型を以て連続し *Lathys* に統合されたことがある。

- (3) 牙堤歯 記載には必ずこの数が示されるが、この数に変化の多いグループと変化がなく安定しているグループがある。*Cybaeus* は個体によって変化があるが、*Lycosidae* はほぼ安定しており、*Alopecosa* や *Xerolycosa* は後牙堤2本といふのはほぼ安定している。*Coelotes* では後牙堤2歯のものは安定しているが、3か4のものは左右3-3、3-4、4-4の変化がある。
- (4) 脚のとげ ある属や科では重要であるが、個体により変化のあるものもある。

5. 日本のクモと外国の学者

日本のクモの研究に手をつけたのは外国の学者であったが、その後日本人の手によってなされ今日におよんでいる。しかし最近になって再び外国の学者が日本のクモに眼をつけ始めた。明治の初期は未知種に命名するという仕事であったが、現在はもう一度新しい分類学の眼で見直そうとしているのである。ここにも分類学の歴史がうかがわれるが、今やっているわれわれの仕事はそのどちらであろうか。

旧北区あるいは全北区のクモを研究するため日本のが含まれている場合、分類学的にある群を検討するためにそれに日本の種が含まれている場合、自国のものと比較研究のため……などそれぞれ目的はちがっているが、かなり多くのクモがとり上げられ始めた。

- (1) Crome は旧北区のカニグモ（日本の資料は出来る限り送った）を検討整理を始めたが、残念ながら仕事半ばで死亡された。
- (2) Wunderlich はコサラグモの *Cornicularia* を検討して、日本の *C. imadatensis* を *Oia imadatensis* として属名を大井氏に献名した。
- (3) Leesch は北海道のガケシグモを新種として *Callobius hokkaido* を設けた。
- (4) Brignoli は日本・台湾のクモを検討した (Acta 26(2))
- (5) Prószyński は旧北区のハエトリを検討中。日本のものもかなり含まれ、近いうちに発表される予定 (Annales Zoologici), 属名がかなりかわること。
- (6) Lehtinen は世界中のクモを検討し、この中に日本のものいくつかに手をついている。
- (7) その他 Coyle のカネコタテグモ、エゾトタテグモ、Helsdingen のサラグモ、Cooke のイヨグモ、Kronestedt のコモリグモ、Platnick のテオノグモ、Deeleman-Reiskind のマシラグモの検討など次々と業績が出ており、また進行中のものもある。

日本の学者に依頼して標本を集めている人、自ら採集に出かけて来る人などあるが、ドイツにある日本のタイプ標本に基いている人がかなり多い。本当に日本のものを調べるには、タイプ標本を見る必要があり、また属の検討にはその属の type-species を見る必要がある。鈴木正将氏がドイツでメクラグモの type を検し分類体系を検討されつつある。日本のクモはドイツのフランクフルト・ベルリン・ミュンヘンにある博物館、フランスのパリの博物館に保管されている。日本からも何人かドイツやフランスに出かけてタイプを見てくる人が出てほしいものである。

6. クモ学者以外のクモの研究

最近は農業の上で天敵としてのクモに注目し、昆虫学者の中でクモの生活史などを研究する人がかなり出ている。たとえば福島正三氏のハナグモの生活史、桐谷圭治氏ほかのキクヅキコモリグモの個体群生態など著名な業績がある。「クモ学者よ、こんなことをわしたちにやらせるなよ」といわれぬようおたがいに努力したいものである。

以上分類学を中心に思いついたまま述べて来たが、わが国のクモの研究はおくれているといい出してから相当の年数がたっている。おくれている原因の一つとして今まであまり研究する人がいなかつたとか、文献や参考書がなかったからとか、何とか先輩のせいにしていいわけをしてきた。

しかしもはや今ではその責任はわれわれにある。日本の研究がおくれているのは、われわれの責任である。われわれがやらないからだという自覚にたたなければならない。他の分野の人たちから日本のクモ学者は何をしているかといわれぬようにしたいものである。

現状と展望と題しながら、お説教めいたことを数々書いたが、これは将来への展望が明かるいものであってほしいと願う心からである。

今後発展すべきエネルギーは十分にたくわえられている。老兵にかわって新進気鋭の若人達の活躍を切に祈るものである。

1974年 クモ学界10大ニュース

恒例の10大ニュースをお届けします。といっても今年は1つ足りません。もれています。大ニュースがあれば御一報下さい。月を追っていますのでどれが1位という訳ではありません。

その1 小松敏宏氏、第6回国際蜘蛛学者会議へ

4月22日から30日まで、オランダ・アムステルダムで開催された第6回国際蜘蛛学者会議に、松本歯科大学の小松敏宏氏が出席された。前回の会議には、広島大学の鈴木正将氏が参加されたが真正蜘蛛類関係では、小松氏が日本からの参加者としては、初めてであった。8月25・26日に行なわれた東亜蜘蛛学会第6回大会で、簡単ではあったが、氏より出席の報告があった。(竜)

その2 ソメワケトリノフンダマシ東京で採れる

1974年7月24日、高野伸二・大利昌久・新海栄一・新海明の諸氏は私を八王子市内の大学におろした後、景信山にマメイタイセキグモを採集に出かけて行きました。いずれも歴戦のつわものなのでこの様子では本当にマメイタが採れるのではないかと思われる勢いでした。さて現地では予想通り大利氏と両新海氏によって、オオトリノフンダマシ・トリノフンダマシ・シロオビトリなどが次々と見つけられていきましたが、高野氏だけはただ一人一番後から愛用のハッセルブラッド(カメラの名前)を片手に、鳥の声など聞きながらのんびりとついて来ておりました。ところが実は超望遠から接写まできくといわれるその両眼は、いかなるものものがさない殺氣をおび、鳥達はおびえて次々と

逃げまどっておりました。そしてついに葉陰にマメイタとおぼしき影を見つけ、じっと見つめているとクモは殺気に当たられ身の危険を感じ急いで逃げようとしたところ、不覚にもあせって糸に足をとられ、つまづいてころげ落ちたところをつかまってしまいました。高野氏ゆっくりとクモをながめるとなればマメイタではなくソメワケトリノフンドマシでした。（ソメワケトリノフンドマシ 関東・中部地方では最初の記録であり北限にあたる。）なお新海氏は昨年のキジロオヒキに続きホームグラウンドで2連敗を喫しました。

—途中経過は大利・新海氏談—

それではマメイタころんでソメワケとなるの一席このへんで終了と致します。（虎）

その3 丹沢山麓でマメイタイセキグモ

1973年10月に見られたオダカグモを撮影しようと、8月8日に再度神奈川県飯山観音を訪れた高野伸二氏は、社屋より少し下の樹高3m位のカシの木をふと見上げたところ、葉のうらに変な形の小塊がついていた。

はてカタツムリのふんかと疑いながら、葉を引き寄せて見ると何とマメイタ！ 前年の千葉県に統いての関東での出現となった。このマメイタイセキグモは、高野氏が生きたまま持ち帰り、5日間飼育し、撮影した後、13日に同じ木に放された。（鷹）

その4 ミジングモ属の食性わかる

ヒメグモ科のクモには形態・習性ともに変わったものが多く、今だにヒシガタグモ・ツクネグモ・ミジングモの各属は網を張るかどうかまで確認されていない状態であった。しかし今夏ついにミジングモ属中のカニミジングモ・シモフリミジングモ・キベリミジングモの3種の食性が松本・新海両氏により観察された。これらのクモは網を張らず、樹の幹あるいは枝のつけ根の部分から一本の糸でぶら下り、その樹の幹を昇り降りしているアリに糸をかけ、アリを幹から離して宙吊りにした後、糸を巻いて捕食するとのことである。完全な好蟻性クモかどうか今後多くの方々に注意をお願いしたい。

（鷹）

その5 東亞蜘蛛学会第6回大会

また東京にもどってきた学会の大会は、今年は2日間にわたって行なわれるという今までで最大のものとなった。8月25日から26日にかけて宿泊施設のある八王子の私学教育研究所研修センターにおいて、2日にわたって講演・総会・懇親会がくりひろげられた。また24日の夜には高尾山で「トリノフンドマシを見る会」が催され、トリノフンドマシ各種の造網などが観察された。北海道から九州まで日本各地から多くの会員が集まり、しかも一夜を同宿してクモの話に花を咲かせたことはたいへん意義深いものがあろう。講演の内容も多彩で、石野田辰夫氏の花粉をたべるクモのFilmにハッとする驚き、千国安之輔氏のハエトリグモのスライドには皆アッと思を飲んだ。（虎）

その6 キンヨウグモ東京に出現す

最近キジロオヒキグモ・ソメワケトリノフンドマシなど南方系のクモが次々と東京に現われて来ているのに腹を立てた北方系のキンヨウグモが9月30日ついに東京に進出して来た。場所は同じ景信山で、トリノフンドマシの造網写真を撮影に来ていた松本・新海両氏によって採集された。キンヨウグモも夜10時すぎなので安心して網を張ろうかなど出て来たところに、まさかクモキチガイが2人そろってやって来るとは思わなかつたであろう。不運であった。（鷹）

その7 日本産 *Pirata* 属のモノグラフ成る

本年12月20日発行の東亞蜘蛛学会誌 *Acta Arachnologica* に「Japanese Wolf Spiders of the *Pirata*, with Descriptions of Five New Species (Araneae : Lycosidae)」と題する論文が載せられた。著者は大阪府立大学の田中穂積氏。モノグラフの形で発表されたものは、近年では本論が唯一のものと思われる。検索表および雌雄の生殖器の図を付した、9種の記載があり、今回の研究では不明であった3種についてもメモしてある。これで *Pirata* 属はかなりすっきりするのではないかどうか。（虎）

その8 クモ・ダニ・多足合同例会

暮も押詰った12月22日の日曜日、例年の通り多足類懇談会、ササラ会及び本会の三合同例会が開催された。近藤昭夫氏によるクモ卵の発生状況の供覧のほか、興味多い発表やスライド映写が続々、参加者は先年より3人少ない29名ではあったが内容は充実した有意義な一日であった。（龍）

その9 ついに今年は10大ニュースにならず

今年はついに10大ニュースまで行きませんでした。クモ研究が停滞している訳ではないようですが、なお一層のファイトが望されます。1974年の談話会活動の集成(?)ともいいくべきこのキシダイア39号の厚みで勘弁していただきましょう。

選者は栗原輝代子・鶴田順一・梅田重雄・松本誠治・新海栄一・小野辰嗣の6人です。

訂正とお詫び

本誌38号3頁の紹介欄、水野寿彦著「日常の生態学」の紹介文の中に「ほら穴の世界の中のコシロカネグモはサンロウドヨウグモだと考えられるが………」という記事がありました。これはコシロガネグモで正しいことが同定者からの御指摘でわかりました。また水野氏の当時の所属を京都大学としましたが、大阪学芸大学の誤りでした。ここに訂正してお詫び致します。

（虎）

石尊山の真正蜘蛛類

菅 波 洋 平 ・ 関 由美子
沼 田 貞 子 ・ 堀 越 早 苗

I はじめに

茨城県の真正蜘蛛類については、現在までに227種が明らかにされ、そのことに関しては、茨城県高等学校教育研究会生物部会誌に発表する予定である。（原稿提出済）

しかしこれだけ細かな点については、調査不充分であり、地味な採集活動を続けて行かなければならぬ。

そこで筆者らは1973年から1974年にかけて、茨城県の北部に位置する石尊山（386m）で14回採集会を持ち、調査してきた。

その結果17科41属67種が採集された。種類数は少なく、この結果をもとにして県内のファウナを論ずることは、不可能であるが、県内新記録のものが3種類採集されるなど、かなりの成果を上げることができた。

II 調査概要

(1)調査場所：茨城県多賀郡十王町の西部に位置する石尊山（386m）

(2)調査期日：1978年7月25日、28日、8月1日、4日、8日、11日、18日、22日

1979年7月26日、28日、30日、8月7日、12日、20日

(3)調査方法：ハンドソーティングを主とし、スリーピング、ピーティング、シフティング法などにより採集した。

III 目録（※は茨城県新記録）

A T Y P I D A E

ジグモ科

1. *Atypus karschi* Doenitz

ジグモ

U L O B O R I D A E

ウズグモ科

2. *Uloborus sybotides* Boes. et Str.

カタハリウズグモ

3. *Uloborus varians* Boes. et Str.

ウズグモ

S E G E S T R I I D A E

エンマグモ科

4. *Ariadna lateralis* (Karsch)

ミヤグモ

P H O L C I D A E

エウレイグモ科

5. *Pholcus phalangioides* (Fuesslin)

イエヌエウレイグモ

T H E R I D I I D A E

ヒメグモ科

6. *Rhomphaea sagana* (Doen. et Str.)

ヤリグモ

7. *Anelosimus crassipes* (Boes. et Str.)

アシブトヒメグモ

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

8. <i>Ariamnes cylindrogaster</i> Simon	オナガグモ
9. <i>Theridion japonicum</i> Boes. et Str.	ヒメグモ
10. <i>Theridion tepidariorum</i> (C. Koch)	オオヒメグモ
11. <i>Theridion kompirense</i> Boes. et Str.	コンビラヒメグモ
12 <i>Theridion chikunii</i> Yaginuma	バラギヒメグモ
13. <i>Theridion yunohamense</i> Boes. et Str.	ユノハマヒメグモ
LINYPHIIDAE サラグモ科	
14. <i>Neolinypbia fusca</i> Oi	クスミサラグモ
15. <i>Prolinyphia limbatinella</i> (Boes. et Str.)	フタスジサラグモ
16. <i>Prolinyphia longipedella</i> (Boes. et Str.)	アシナガサラグモ
MIMETIDAE センショウグモ科	
17. <i>Ero japonica</i> Boes. et Str.	センショウグモ
ARGIOPIDAE コガネグモ科	
18. <i>Araneus uyemurai</i> Yaginuma	ヤマオニグモ
19. <i>Araneus fuscocoloratus</i> Boes. et Str.	ヤミイロオニグモ
20. <i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
21. <i>Araneus abscissus</i> (Karsch)	キザハシオニグモ
22** <i>Araneus lugubris</i> (Walckenaer)	コグチャオニグモ
28-VII 1974 ♀1	
23. <i>Araneus cornutus</i> Clerck	ナカムラオニグモ
24. <i>Araneus ejusmodi</i> Boes. et Str.	ヌサオニグモ
25. <i>Araneus cucurbitinus</i> Clerck	ハナオニグモ
26. <i>Araneus mitificus</i> (Simon)	ビジョオニグモ
27. <i>Neoscona doenitzi</i> Boes. et Str.	ドヨウオニグモ
28. <i>Neoscona mellotteei</i> (Simon)	ワキグロサツマノミダマシ
29. <i>Neoscona scylla</i> (Karsch)	ヤマシロオニグモ
30. <i>Neoscona scylloides</i> (Boes. et Str.)	サツマノミダマシ
31. <i>Zilla sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ
32 <i>Argiope amoena</i> L. Koch	コガネグモ
33. <i>Argiope bruennichii</i> (Scopoli)	ナガコガネグモ
34. <i>Argiope minuta</i> Karsch	コガタコガネグモ
35. <i>Chorizopes nipponicus</i> Yaginuma	ヤマトカナエグモ
36. <i>Cyclosa atrata</i> Boes. et Str.	カラスゴミグモ
37. <i>Cyclosa sedeculata</i> Karsch	ヨツデゴミグモ
38** <i>Cyrtarachne nigra</i> Yaginuma.	クロトリノフンダマシ

30-VII 1974 ♀1

39. <i>Meta kompirensis</i> Boes. et Str.	タニマノドヨウグモ
40. <i>Nephila clavata</i> L. Koch	ジョロウグモ
TETRAGNATHIDAE アシナガグモ科	
41. <i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma	オオシロカネグモ
42. <i>Leucauge subgemmea</i> Boes. et Str.	キララシロカネグモ
43. <i>Leucauge subblanda</i> Boes. et Str.	コシロカネグモ
44. <i>Tetragnatha japonica</i> Boes. et Str.	ヤサガタアシナガグモ
45. <i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch	アシナガグモ
AGELENIDAE タナグモ科	
46. <i>Agelena limbata</i> Thorell	クサグモ
47. <i>Agelena opulenta</i> L. Koch	コクサグモ
48. <i>Coelotes modestus</i> Simon	ヤマヤチグモ
PISAURIDAE キシダグモ科	
49. <i>Dolomedes saganus</i> Boes. et Str.	スジアカハシリグモ
LYCOSIDAE コモリグモ科	
50. <i>Pardosa T-insignita</i> (Boes. et Str.)	ウツキコモリグモ
51. <i>Pirata piraticus</i> (Clerck)	カイゾクコモリグモ
OXYOPIDAE ササグモ科	
52. <i>Oxyopes sertatus</i> L. Koch	ササグモ
THOMISIDAE カニグモ科	
53. <i>Misumenops japonicus</i> (Boes. et Str.)	コハナグモ
54. <i>Misumenops tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ
55. <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ
56. <i>Philodromus cespitum</i> (Walckenaer)	シロエビグモ
25-VII 1973 ♀1	
57. <i>Synaema globosum japonicum</i> Karsch	フノジグモ
58. <i>Tmarus piger</i> (Walckenaer)	トラフカニグモ
59. <i>Tibellus oblongus</i> (Walckenaer)	スジシャコグモ
SALTICIDAE ハエトリグモ科	
60. <i>Carrhotus xanthogramma</i> (Latreille)	ネコハエトリグモ
61. <i>Evarcha albaria</i> (L. Koch)	マミジロハエトリグモ
62. <i>Marpissa elongata</i> (Karsch)	ヤハズハエトリグモ
63. <i>Marpissa magister</i> (Karsch)	オスクロハエトリグモ
CLUBIONIDAE フクログモ科	

KISHIDAIA No. 9 1975, Mar.

64. *Chiracanthium japonicum* Boes. et Str. カバキコマチグモ
 65. *Clubiona jucunda* (Karsch) ヤハズフクログモ
 HETEROPODIDAE アシダカグモ科
 66. *Heteropoda forcipata* (Karsch) コアシダカグモ
 67. *Micrommata roseum* (Clerck) ツユグモ

V 石尊山産真正蜘蛛類の科・属・種数一覧表

Family	Gen.	S p.	Family	Gen.	S p.
Atypidae	1	1	Agelenidae	2	3
Uloboridae	1	2	Pisauridae	1	1
Segestriidae	1	1	Lycosidae	1	2
Pholcidae	1	1	Oxyopidae	1	1
Theridiidae	4	8	Thomisidae	6	7
Linyphiidae	3	3	Salticidae	3	4
Mimetidae	1	1	Clubionidae	2	2
Argiopidae	9	23	Heteropodidae	2	2
Tetragnathidae	2	5	Total	17	41
					67

V ファウナの特徴と垂直分布

茨城県全体から見たクモの分布の要素は次のようにあり、この結果が当然県内にある石尊山のデータを検討するときの目安となる。

茨城県に分布する227種の構成要素別種類数（）内は全種数に対する割合

- 旧北区系の種……………19種（8.5%）
- 全北区系の種……………12種（5.0%）
- 世界共通種……………9種（4.6%）
- 東洋区系の種……………14種（6.0%）
- 日本基本種……………174種（76.5%）

2年間の研究で、石尊山にもこれらの5つの系統のクモが生息していることがわかった。それを上記と同様の表わし方をすると、次のようになる。

石尊山に分布する67種の構成要素別種類数（）内は全種数に対する割合

- 旧北区系の種……………5種（7.5%）
- 全北区系の種……………4種（6.0%）
- 世界共通種……………3種（4.5%）
- 東洋区系の種……………5種（7.5%）
- 日本基本種……………50種（74.5%）

全種数に対する割合を見ると、茨城県全体の構成要素に極めて似ていて、構成要素の中心となるのは日本基本種であり、67種のうちのほとんど大半が、この系統に属している。

次に北方系と南方系のクモについて注目してみると、茨城県は本州南岸線より北にあるために、北方系のものが9種類と、南方系の5種類より多い。

しかし県全体では、北方系のものが31種類、南方系のものが14種類となっていて、北方系は南方系の2.2倍以上であるのに対して、石尊山産のものでは、北方系のクモは南方系のクモの1.8倍という結果が得られた。

また県内では初めてのコゲチャオニグモ、クロトリノフンダマシなど南方系のものが採集されたことは、分布的に興味が持てる。

このことは、石尊山が福島県に近い県北部に位置はしているが、海岸に近く暖流の影響を受け、冬でも比較的暖かいことと、山地といつても、非常に低いためではないかと考えられる。

この地方の平地のクモについても詳しく調査し、その上でさらに動物地理学的の考察をしたい。

次に石尊山におけるクモの垂直分布について記してみる。

石尊山を高度によって300m以上、300m~200m、200m~100m、100m以下の4つの領域に区分し、それぞれの領域ごとに採集したものを掲げてみると次のようになる。

石尊山におけるクモの垂直分布

種名	100m 以下	100m 200m	200m 300m	300m 以上							
	以下	200m	300m	以上	以下	200m	300m	以上	以下	200m	300m
ジグモ	●	●			オニグモ		●				
カタハリウズグモ		●			キザハシオニグモ			●			
ウズグモ	●		●		コゲチャオニグモ		●				
ミヤグモ	●	●			ナカムラオニグモ		●	●			
イエユウレイグモ	●				ヌサオニグモ						
ヤリグモ	●				ヤミイロオニグモ						
アシトヒメグモ	●		●	●	ハナオニグモ						
オナガグモ	●	●			ビジョオニグモ						
ヒメグモ	●		●	●	トヨウオニグモ						
オオヒメグモ	●				ワキグロサツマノミダマシ		●	●	●		
コンビラヒメグモ		●			ヤマシロオニグモ		●	●			
バラギヒメグモ	●				サンマノミダマシ				●		
ユノハマヒメグモ		●			カラフトオニグモ			●	●		
クスミサラグモ	●		●		コガネグモ			●	●		
フタスジサラグモ		●	●		ナガコガネグモ		●		●		
アシナガサラグモ	●				コガタコガネグモ			●	●		
センショウグモ				●	ヤマトカナエグモ				●		
ヤマオニグモ	●	●			カラスゴミグモ					●	

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

ヨツデゴミグモ	●	●	●		コナグモ		●		
クロトリノフンダマシ		●			ハナグモ		●	●	●
タニマノトヨウグモ	●				ワカバグモ	●	●	●	●
ジョロウグモ	●		●		シロエビグモ		●	●	●
オオシロカネグモ	●				フノジグモ	●			
コシロカネグモ	●	●	●	●	トラフカニグモ		●		
キララシロカネグモ	●		●		スジシャコグモ		●		
ヤサガタアシナガグモ	●				ネコハエトリグモ	●			
アシナガグモ	●				マミジロハエトリグモ		●		
クサグモ		●	●	●	ヤハズハエトリグモ			●	
コクサグモ	●		●		オスクロハエトリグモ			●	
ヤマヤチグモ			●		カバキコマチグモ	●	●	●	●
スジアカハシリグモ		●			ヤハズフクログモ		●		
ウツキコモリグモ	●			●	コアシダカグモ	●			
カイゾクコモリグモ				●	ツユグモ		●		
ササグモ		●							

以上の結果から見て、全体的に分布しているものは、カバキコマチグモと、コシロカネグモであることがわかった。

アシプトヒメグモ、ヒメグモ、ワキグロサツマノミダマシ、ヨツデゴミグモ、クサグモ、ハナグモなどもほど全城に分布しているものと思われる。

これらのものは、個体数也非常に多く、特にコシロカネグモはいたるところに網を張っている。山に生息するクモは、一般的に上に行くほどコサラグモ科のものや、コモリグモ科などのものが多くなるが、山が低いということと海岸に近いということで、平地と気温差がそれほどないと考えられ比較的大型のクモが高いところにも生息し、各高度ごとの差違はあまり見られなかった。

参考文献

斉藤三郎(1959)原色蜘蛛図説(北隆館)

菅波洋平(1964)西金沙山の真正蜘蛛類茨城大学生物研究会会誌

(1970)八溝山の真正蜘蛛類について茨城大学生物研究会会誌 15:27-44

(1971)茨城県の真正蜘蛛類 東亜蜘蛛学会会誌 ATYPUS (56):14-37

茅根重夫 筑波研究学園都市周辺の蜘蛛類 特別地域自然財分布調査報告書

・菅波洋平(1970) (茨城県教育委員会) pp. 288~291, pp. 311~314

茨城県産クモ類リスト 茨城県高等学校教育研究会生物部会誌
(1973)

(24):68~76

八木沼健夫 1968 原色日本蜘蛛類大図鑑(保育社)

(1970)日本の真正蜘蛛類相 国立科博研報 13(4):639~701

埼玉県のクモ類研究史(1)

大野正男

埼玉県の真正蜘蛛類に関する研究は、明治・大正期には全くなく、昭和期に入って初めて開始された。しかし1933年（昭8）には、当時、熊谷高女の教諭であった小沢国平氏により、すでに「埼玉県産蜘蛛類」なる報文が公表されている（61種記録）。また、1937年（昭12）には羽富正一郎氏により、志木附近から47種のクモが記録され、さらに1938年（昭13）には、植村利夫氏により、天覧山から56種のクモが報告された。

こうして埼玉県のクモのファウナは順調に解明されていくかに見えたが、小沢氏はその後、研究の対象を主として鳥類に向けられ（鳥類に関する論著は日本鳥学会の「鳥」や日本野鳥の会の「野鳥」誌などに数多く発表されている。しかし、昭和20年の熊谷空襲で資料文献を焼失されてからは、主として郷土史の研究に力を注がれている）クモからは遠ざかってしまい、また木村冉氏のように、地元（小樽や小倉にも一時奉職されたが、郷里の加須町と川越市が主。川越高校時代の筆者の恩師でもある）にあって本格的にクモの研究を開始された人も、いくつかの観察記を発表しただけで、ファウナに関しては特にまとまった論著を公表することなく研究を中止してしまったため、結局、地元研究者による調査活動は、その後10年以上にわたってほとんど進展していかなかった。この当時の埼玉県のクモ類に関する知見は、主として県外研究者の断片的研究によって僅かな増加を示したにすぎない。

この傾向は戦後になってもなおしばらく続いたが、1949年（昭24）、まず杉田康怒氏による浦和のクモについての報告が現われ（17種）、さらに1954年（昭29）には浦和市の畠田喜久次氏により「川口市内のくもの研究」が発表され、同市およびその周辺地域から65種のクモが記録されるに至った。その他、松山高校の生物部の諸君も、当時同校に奉職されていた篠原圭三郎氏の指導の下に、比企郡下のクモについて調査し、その結果をいくつかの報文として発表している（文献欄、参照）。

しかし、この当時はまだ同定に必要な図鑑類もほとんどない時代であったため、それらの報文の中には、止むを得ないことはいいながら、同定の不正確な種が少なからず見受けられる。

クモについての本格的な図鑑は、いうまでもなく1959年（昭34）に刊行された齊藤三郎氏の「原色蜘蛛類図説」にはじまるが、翌年には八木沼健夫氏の「原色日本蜘蛛類大図鑑」も刊行された。こうして2年間に相次いで刊行された2つの図鑑のおかげで、それまで困難を極めたクモの同定がかなり容易に行えるようになった。この時期が本邦におけるクモ類研究史上的一大転換期にあたることは、すでに大方の認めるとところになっている。日本各地にクモの同好者がふえはじめたのはこの頃からであり、また、公表される各地のクモ目録が充実はじめたのもこの頃からである。

埼玉県においてもその例にもれず、三田久男・南部敏明両氏（1962）の水田のクモ目録（21種）を皮切りに、新海栄一氏（1965）の天覧山のクモの追加記録（18種）、同じく同氏（19

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

66) の奥秩父のクモ目録(63種)がこれに続き、さらに1967年(昭42)には遠藤啓一氏の「埼玉県産クモ目録I」が公表されることになる。

その後は、東京クモ談話会をはじめ、遠藤啓一、権田重雄、川端純一、小峰博他大宮西高生、嶋田順一、嶋田育弘などの諸氏による調査活動が順調に進み、最近数年間に発表された埼玉県のクモに関する論著は、主要なものだけでも10篇を越えている(文献欄参照)。

いま、その調査活動の流れを大別してみると、次の2つになるかと思う。すなわち、1つは東京クモ談話会の合同調査の課題として進められている奥秩父のクモ相の調査であり、もう1つは、「埼玉県動物誌」作成作業の一環として進められている全県的なクモ相調査である。いずれ両者の資料はもち寄られ、埼玉県動物誌の資料として1本化されることを望みたいが、こうした調査活動に関連して、川端純一、遠藤啓一、嶋田順一の諸氏など、地元の熱心な研究者が成長しつつあることは喜ばしい。大河内哲二、白勢正義両氏のように、すでに研究者として充分力をつけた人々の地元における活躍が目立たないのは残念であるが、これらの諸氏にも、それぞれの立場で大いに活躍してもらいたいものである。

埼玉県産のクモ類の総目録は、この稿には含めなかったが、すでに分布が確認され、報告されたものだけでも200種を軽く越えている。恐らく、埼玉県動物誌が完成されるまでには300~350種の所産が明らかにされることであろう。

しかし、このようにしてファウナの概略が明らかにされたとしても、埼玉県のクモの研究はそれで終る訳ではない。本当のクモの研究はそれからである。将来は単なるリスト作りから更に発展して、地域別・種類別の詳しい分布や個生態や群生態にまで範囲を拡げ、自然を背景とした巾広い研究調査活動が展開されていかねばならないであろう。県内外の研究者がたがいに協力して、こうした活動がさかんになることを期待してやまない。

本稿を草するに当り、貴重な文献をご恵与下された南部敏明、嶋田順一、新海栄一の諸氏、ならびに文献入手にご援助を賜った長谷川仁、市川和夫、斎藤良夫、篠原圭三郎の諸氏に対し、ここに改めて感謝の意を表する次第である。

埼玉県のクモ類に関する文献目録

本目録には、現在までに筆者の知り得た、埼玉県のクモに直接関係ある文献を集録した。直接参照できなかったものも2、3あるが、それらについては、春日部高校の生物部誌その他2、3高校のクラブ誌に掲載された未見の記事と併せて、次報において集録したいと思っている。

- 1) 遠藤啓一(1967) 埼玉県産クモ目録 I, *Atypus*, (43): 23~27 (埼玉県産クモ 107種の記録)
- 2) 深沢治男(1938) ニシナグモの新産地、芝中博物同好会々誌、1(1): 21 (武藏嵐山駅附近)

- 3) 深沢治男、他 (1938) 第2回採集会（埼玉県小川町方面）、芝中博物同好会々誌、
1(1): 24~28 (マネキグモ、チュウガタコガネグモ、ニシナグモの3種が記録される)
- 4) 権田重雄 (1972) 真正蜘蛛各地の同定目録、Kishidaia, (29-32): 9~13 (埼玉県正丸峠のクモ18種の記録あり)
- 5) 権田重雄 (1972) 第3回奥秩父観察会 同上: 38 (川又におけるセスジガゲジグモの記録を含む)。
- 6) 羽富正一郎 (1937) 蹤進日本の理科教育、東京都豊島区教育研究会発表録 第二輯: 53 ~56 (志木およびその附近のクモ16科33属47種のクモ目録を附す)。
- 7) 島山久重 (1943) 洞窟生物の研究 (二)、東京府中等教育研究会博物部研究報告、(2): 頁不詳 (影森鐘乳洞のハタケヤマユウレイグモについて記されているはずであるが筆者未見)
- 8) 島山久重 (1959) 洞窟動物、「隨筆あしあと (島山久重遺稿)」: 141~146 (島山
久尚・幸久刊) (影森鐘乳洞に産する白色のユウレイグモ=ハタケヤマユウレイグモ
について略述、2回にわたって連載された上記報文を簡略化したもの)
- 9) 林 司・木村 寛 (1957) 比企郡の主なクモについて、松山高校生物部々報、(3): 6~9
(22種のクモを記録)
- 10) 細野善照 (1943) 寸草蜘蛛談、Acta Arach., 8(3): 73~77 (ペリンダイソウロウ
グモの卵のうとユウレイグモについての観察記録、飯能にて)。
- 11) 市川逸郎、他4名 (1965) 松山附近のクモと標本作成、松山高校生物部々報、(6): 31~33 (クモ7種の記録)
- 12) 金子茂雄・小峰 博・小南茂雄 (1967) クモの研究、あぎなし、(4): 27~30 (大宮市
内で採集したクモ24種の記録を含む)。
- 13) 加藤正世 (1937) 蝉 (13) (蝉の自然敵としてのクサグモ、他)、昆虫界、5 (41)
: 461~463 (クサグモによってニイニイゼミが食われること、天竜山にての観察)。
- 14) 加藤正世 (1939) みだれかご(4), Acta Arach., 4(3): 110~111 (狭山丘陵山
口観音におけるチュウガタコガネグモの記録など)。
- 15) 加藤正世 (1939) 大宮公園採集会 昆虫界 7 (68): 633 (ノロウグモの記録を含む)。
- 16) 加藤正世 (1961) コケオニグモ・スジブトハシリグモとオカメコオロギの幼虫、「虫の世
界」: グラビア4, 94~95 (社会思想研究会出版部) (コケオニグモは狭山湖附
近、スジブトハシリグモは飯能での記録、ともに写真あり)。
- 17) 川端純夫・遠藤啓一 (1972) 昭和46年度埼玉県動物誌基礎調査真正クモ目調査報告、埼
玉県動物誌仮目録、(1): 43~46 (72種の記録)
- 18) 川端純夫・遠藤啓一 (1973) 昭和47年度埼玉県動物誌基礎調査真正クモ目調査報告、同
上、(2): 71~73 (61種の記録)。
- 19) 川端純夫 (1974) 昭和48年度埼玉県動物誌基礎調査真正クモ目、同上、(3): 135~138
(99種の記録)
- 20) 川上昌之 (1973) イエオニグモの実験、あぎなし、(10): 15~19 (エサの捕え方、
KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

侵入蜘蛛に対する行動、網に説明を与えたときの行動などについて記す)。

- 21) 木村 冉 (1934) 普通に見る蜘蛛八種の観察、博物学雑誌(東京)、32(53): 192 ~ 198、2pl.s. (地名は記されていないが、加須町での観察も含まれている模様)
- 22) 木村 冉 (1935) 蜘蛛の越冬種調べ、同上、33(54): 35~38、1pl. (加須町での観察、27種のクモについて記す)。
- 23) 木村 冉 (1949) 蜘蛛採集便覧、生物研究(川越高校)、(2): 1 (主として採集法について記す)。
- 24) 岸田久吉 (1936) 日本帝国産コガネグモ属数種に就て、Acta Arach., 1(1): 14 ~ 27、1pl. (チュウガタコガネグモの北限が埼玉県であることを記す)。
- 25) 小峰 博、他3名 (1968) 山王沼附近のクモ、あぎなし、(5): 34~38 (大宮市ニッ官にある山王沼周辺のクモ23種についての観察記)
- 26) 小山保信・高柳雅一 (1969) クモの巣について、同上、(6): 62~63 (大宮附近で採集したクモ34種を造網の型によって分類したもの)
- 27) 久保田武雄・石井宏治 (1959) クモの研究、松山高生物部々報、(4): 9~12 (松山市附近で採集したクモ26種の記録 小川、松山、旭山、市ノ川、川越などが施設で挙げられている)。
- 28) 松本誠治・新海栄一・浜村徹三・大河内哲二 (1970) 関東地方の真正蜘蛛類について、Atypus, (53): 13~14 (分布上特記すべきものとして、サンロウドヨウグモ、カトウツケオグモなどが埼玉県産として挙げられている)。
- 29) 松山高校生物部 (1952) 埼玉県比企郡内における動物の分布(松山高校生物部) (筆者未見)
- 30) 三田久男・南部敏明 (1962) 秋期水田に棲息するクモ類についての2、3の観察、関東東山病害虫研究会年報、(9): 56 (鴻巣で観察したクモ21種を記録)。
- 31) 百瀬文雄 (1935) 伊豆岳の昆虫採集記、附伊豆岳採集動物目録、自然科学と博物館、6(7): 17~20 (イオウイロハシリグモとクサグモの記録)。
- 32) 南部敏明 (1966) キゴシジガバチの習性、児玉高校研究集録、(1): 17~22 (鴻巣、児玉、寄居などで観察した獲物のクモ12種を記録)
- 33) 南部敏明 (1967) *Trypozylon pennsylvanicum japonense* Tsuneki の Prey、生物研究、11(1/2): 13 (児玉町と鴻巣市で観察したクモ12種の記録)。
- 34) 南部敏明 (1969) 埼玉県のジガバチモドキ類、埼玉生物、(9): 17~18 (獲物のクモの科名のみを挙げる)
- 35) 南部敏明 (1971) キスケジガバチモドキの習性、生物研究、15(1/2): 1~4 (宝登山・寄居などにおいて観察した獲物のクモ11種の記録)。
- 36) 南部敏明 (1971) ヒメジガバチモドキの習性、生物研究、15(3/4): 69~74 (鴻巣・児玉・寄居で得た獲物のクモ25種の記録)。
- 37) 南部敏明 (1972) 埼玉県におけるコシプトジガバチモドキおよびマダラジガバチモドキの餌 Atypus, (59): 6~8 (コシプトジガバチモドキの獲物はクモ15種 観察地は宝登山・児玉町・寄居; マダラジガバチモドキの獲物としてはクモ4種 観察地は寄居)。

- 38) 南部敏明 (1972) ナンブジガバチモドキの習性、生物研究、16(1/2): 9~14 (獲物としてのナンブコツブグモについて記録される。宝登山および児玉の東小平百体観音)
- 39) 大河内哲二 (1968) クモの授食行動、昆虫と自然、3(9): 25~27 (主として岩槻市における観察と思われるが観察地が記されていないので不明)。
- 40) 大河内哲二、他 (1970) クモの同定ポイント(1), *Kishidaia*, (15): 6~8 (大宮のオオヒメグモの記載を含む)。
- 41) 小沢国平 (1933) 埼玉県産蜘蛛類、埼玉県女子中等学校博物研究会報、(3) (この報文には次の稿により61種記録されていることが推定されるが、著者未見のため詳細は不明。小沢氏自身も熊谷空襲の折焼失。他に何人かの心当たりを探してみたが未だにこの刊行物に接し得ない)。
- 42) 小沢国平 (1935) 埼玉県内の動物、全国中等学校博物教育会々報、3(1): 1~5 (クモ17種の種名が挙げられているが、他に“小沢調査により61種を得”と附記されている)。
- 43) 小沢国平・高木幹雄 (1963) 熊谷の自然・生物、「熊谷市史(前編)」: 37~70 (クモ28種の記録がある)。
- 44) 沢田 勇 (1946) 女郎蜘蛛とルリジガ蜂の格斗、虫界速報 (13/14): 71 (浦和市における観察)
- 45) 関口晃一 (1948) ワスレナグモの巣立ち、虫・自然、(18): 92~93 (氏の郷里である北埼玉郡における観察、オナガグモにもふれる)。
- 46) 関口晃一 (1957) ワスレナグモ、自然の観察、(2): 5~7 (北足立郡上尾町における観察)
- 47) 渋谷 肇・金子俊雄 (1957) ゴミグモの研究、松山高生物部々報、(3): 14~15 (ゴミグモの巣網の大きさやゴミの長さを測定、縦横の相関、網の長さとゴミの長さの相関などを調べたもの)。
- 48) 鳩田順一・鶴田育弘 (1973) 埼玉県の真正蜘蛛類、蜘蛛、(1): 1~9 (この刊行物は氏等の個人出版物で、埼玉県内各地のクモ93種を記録。各種とも産地が附記されている)
- 49) 鳩田順一・鶴田育弘 (1974) 蜘蛛1号における訂正と追加の目録、蜘蛛、(2): 1~4 (追加種8種を含む94種の記録。追加種以外は産地が記されていない)。
- 50) 鳩田順一・鶴田育弘 (1974) 冬のクモ小観察、蜘蛛、(2): 5 (ミヤグモ、ビジョオニグモ、コアシダカグモその他についての観察)。
- 51) 新海栄一 (1965) クモの研究(天覧山のクモ、その他)、カタツムリ、(15): 20~51、1 p 1. (植村による天覧山のクモ目録に追加すべき種類18種の記録)
- 52) 新海栄一 (1966) 奥秩父の真正蜘蛛類、*Atypus*、(39): 10~12 (昭和40年8月、海城高校生物部の採集会で得た三峠山、二瀬、川又などのクモ類59種と、秩父自然科学博物館所蔵のクモ類4種、合計63種を記録。ただし、種未決定種13種を含む)
- 53) 白井康司 (1969) ジグモの研究、あぎなし、(6): 60~61 (ジグモの活動時間について、飼育環境下で調べたもの)
- 54) 杉田康怒 (1949) 浦和の蜘蛛について、Urawa Biology、(2): 3 (浦和附近のクモ17種の記録)
- 55) 須甲鉄也、他 (1969) おにぐも・じょろうぐも・たなぐも・じぐも、「埼玉郷土辞典・自

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

然篇」：69、186、215、171（埼玉新聞社）（各種についてのかんたんな解説）。

- 56) 高野伸二（1973）小観察あれこれ(2), *Kishidaia*, (35) : 5~6 (キクヅキコモリグモの2回産卵について、高坂で採集した材料で観察)。
- 57) 高島春雄（1950）天覧山虫信、茶業技術、(3) : 32~34 (カネコトタテグモ発見のいきさつに触れる)。
- 58) 常木勝次（1937）蜂二題（キオビベッカフと蜘蛛、他）、昆虫界、5 (41) : 461~463 (キオビベッカフの植物としてヤマシロオニグモを記録、観察地は大里郡後沢)。
- 59) 東京クモ談話会（新海栄一）（1972）奥秩父のクモ、*Kishidaia*, (29-32) : 26~33 (談話会メンバーによる合同調査の結果をまとめたもの、クモ102種を記録)。
- 60) 富田喜久次（1954）川口市内にくもの研究、研究紀要「あゆみ」、(13) : 1~22 (川口附近で採集したクモ65種を記録、各種を図説している。メクラグモにも触れる)。
- 61) 植村利夫（1936）天覧山の蜘蛛採集会概況、*Acta Arach.*, 1(2) : 41 (採集会の状況のみ、クモについて記されず)。
- 62) 植村利夫（1936）天覧山でカネコトタテグモを探るの記、同上、1(4) : 137~139 (東亜蜘蛛学会第1回採集会の催された天覧山において、珍株カネコトタテグモを採集したときの状況を詳記)。
- 63) 植村利夫（1937）村山貯水池の採集会、*Acta Arach.*, 2(2) : 67 (コガネマルの習性につき新知識を習得したと記す)。
- 64) 植村利夫（1938）蜘蛛研究室報(2)（天覧山の蜘蛛、タンボグモとイタチグモ、その他）、*Acta Arach.*, 3(1) : 19~30 (「天覧山の蜘蛛」の項では前後2回にわたるクモ学会採集会によって得られたクモ56種の目録が挙げられ、「タンボグモとイタチグモ」の項ではイタチグモの分布地として天覧山と志木町が記されている。去木町とあるのは志木町の誤植であろう)。
- 65) 植村利夫（1939）葉吊蜘蛛の習性と記載、*Acta Arach.*, 4(4) : 139~145 (產地の1つに天覧山が挙げられている)。
- 66) 植村利夫（1939）大宮公園の採集会、同上 : 171~172 (採集会の状況のみでクモについての記録はない)。
- 67) 植村利夫（1949）カネコトタテグモ採集記、「自然観察記」 : 97~100 (陸水社) (*Acta Arach.*, 1(4)の“天覧山でカネコトタテグモを探るの記”の再録)。
- 68) 八木沼健夫（1954）*Spider fauna* はどれだけ調査されたか、*Atypus*, (7) : 40, 1 map. (全国の調査状況が地図で示され、埼玉県には町田による御岳の報告のあることが示されている。しかし、この御岳は東京の御岳であって埼玉県のそれではない)。
- 69) 八木沼健夫（1968）最近の収穫から、*Atypus*, (46/47) : 34 (筆者が大高山で採集したカトウツケオグモの紹介を含む)。
- 70) 八木沼健夫（1971）日本の真正蜘蛛類相〔II〕、追手門学院大学文学部紀要、(5) : 161~175 (「日本のファウナは地域的にどれだけ調べられたか」の項を含み、埼玉県には速藤、新海、町田などの報告のあることが示されている。この中町田の報告は上述した通り)

- 71) 八木沼健夫 (1973) スズキコモリグモの記載、Acta Arach., 25(1): 16~22 (筆者の採集した埼玉県産の標本に触れる)。
- 72) 八木沼健夫・新海栄一 (1971) 分布資料、Atypus, (55): 33~34 (ナンブコツブグモの産地に児玉町と野上町を挙げる)。
- 73) 八木沼健夫・新海栄一 (1971) 分布資料[1]、Atypus, (57): 18 (セスジガケシグモの産地に大滝村川又を挙げる)。
- 74) 八木沼健夫・新海栄一 (1972) 分布資料、Atypus, (58): 43~44 (*Nesticus brevipes* の産地に名栗の河又鐘乳洞、ナンブコツブグモの産地に奥秩父を挙げる)
- 75) 八木沼健夫・新海栄一 (1973) 分布資料、Atypus, (61): 33~34 (キヌキリグモの産地として黒谷・熊倉山・甲武信岳・雁坂峠・川又などが挙げられる)。
- 76) 矢島達男・関根一喜・大熊善雄 (1971) ジョロウグモの観察、あぎなし、(8): 42~44 (大宮市大成での観察。クモの大きさと網の大きさとの関係、クモの体長と巣の高さとの関係、網上におけるクモの位置などについての調査結果がまとめられている)。
- 77) 湯浅啓温 (1939) 蜘蛛類餌食記録(1)、Acta Arach., 4(3): 90~92 (安行におけるアヅマカニグモの観察記録を含む)。
- 78) 無名子 (1937) 武蔵野博物の会趣意書 (天覧山のカネコタテグモなどについて記す)
- 79) 無名子 (加藤正世?) (1937) 晩秋の採集会、(天覧山へ多峯主山) 昆虫界、5(44): 743~745 (岸田久吉氏が山麓の墓地で巣を発見、カネコタテグモを採集したこと記されている。ただし採集の際ピンセットで腹部を潰した由。1937年10月24日、東亜クモ学会・武蔵野博物の会合同採集会の記録)。
- 80) 無名子 (1970) クモの糸、Kishidaiia, (20/21): 7~8 (朝日新聞埼玉版に掲載された荒川村日野廻り淵に伝わるクモの伝説の紹介)。
- 81) 無名子 (1974) ゴミグモ、あぎなし、(11): 表紙および裏表紙 (かんたんな解説、大宮にも普通に見られると附記)。

土壤動物研究会へのお誘い

クモはもちろんのこと、ミミズ、ダニ、多足類、トビムシなど、土の中に住む動物ならなんでもとりあげてお互いの情報交換を活発にし、日本の土壤動物学をもり立てていこうとする人々の集まりです。今までに次のような活動をしてきました。

研究会; 年1~2回。現在11回 主に生態学会の時に小集会として開催。

会誌; EDAPHOLOGIA 年2回。現在10号 タイプ印刷40~50頁

入会希望者は氏名、所属、住所、専門分野を明記し、会費1,500円を添えて下記へお申し込み下さい。
栃木県西那須野町 農林省草地試験場生態部 中村好男気付 日本土壤動物研究会

電話 西那須野 6 0111 〒329-27 振替 宇都宮 14076番

KISHIDAIIA No.39 1975, Mar.

埼玉県における採集記録(I)

嶋田順一

私が昨年、埼玉県各地を回って採集した結果の幾つかを報告しておきます。今回は、天覧山(飯能市)及びその付近で採集したものは報告しないでおきました。これは、ある程度種類がまとまつた時に「天覧山及びその付近のクモ」として報告するつもりであります。なお、和名の後の記号は同定者の頭文字(S:新海栄一、Y:八木沼健夫、M:松本誠治)です。同定者の方々には心からお礼を申しあげます。

I 羽生市(上村君～三田ヶ谷)	採集日: 1974年6月8日
1. <i>Pholcus phalangioides</i> (Fuesslin)	イエヌウレイグモ
2. <i>Enoplognatha japonica</i> Boes. et Str.	ヤマトコノハグモ (S)
3. <i>Theridion octomaculatum</i> Boes. et Str.	ヤホシヒメグモ
4. <i>T. tepidariorum</i> (C. Koch)	オオヒメグモ
5. <i>Ostearius meranopygus</i> (O. P. Cambridge)	スソクロサラグモ (S)
6. <i>Gnathonarium dentatum</i> (Wider)	ニセアカムネグモ (S)
7. <i>Oedothorax angulituberis</i> Oi	コトガリアカムネグモ (S)
8. <i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
9. <i>Neoscona doenitzi</i> (Boes. et Str.)	ドヨウオニグモ
10. <i>Tetragnatha squamata</i> Karsch	ウロコアシナガグモ (S)
11. <i>Agelenia limbata</i> Thorell	クサグモ
12. <i>A opulenta</i> L. Koch	コクサグモ
13. <i>Alopecosa ebicha</i> Yaginuma	エビチャコモリグモ (S)
14. <i>Misumenops tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ
15. <i>Jotus linea</i> (Karsch)	メガネアサヒハエトリ (M)
16. <i>Clubiona kurilensis</i> Boes. et Str.	チシマフクログモ (S)
17. <i>Herpyllus striatus</i> (Kishida)	トラフグモ (S)
18. <i>Zelotes</i> sp.	(S)

II 飯能市(宮沢湖付近)	採集日: 1970年6月16日
1. <i>Titaneca nipponica</i> Yaginuma	ヤマトガケジグモ (S)
2. <i>Anelosimus crassipes</i> (Boes. et Str.)	アシプトヒメグモ
3. <i>Dipoena castrata</i> Boes. et Str.	ボカシミジングモ (S)
4. <i>Theridion latifolium</i> Yaginuma	ヒロハヒメグモ

5. *Philodromus subaureolus* Boes. et Str. アサヒエビグモ (Y)

III 東松山市（岩殿山）一鳩山村（赤沼試験場）採集日：1970年7月13日

1. <i>Miagrammopes orientalis</i> Boes. et Str.	マネキグモ
2. <i>Pholcus crypticola</i> Boes. et Str.	ユウレイグモ
3. <i>Rhomphaea sagana</i> (Doen. et Str.)	ヤリグモ
4. <i>Theridion japonicum</i> Boes. et Str.	ヒメグモ
5. <i>T. rapulum</i> Yaginuma	ギボシヒメグモ
6. <i>Meioneta</i> sp.	(S)
7. <i>Ero japonica</i> Boes. et Str.	センショウグモ
8. <i>Araneus mitificus</i> Simon	ビジョオニグモ
9. <i>Neoscona doenitzi</i> (Boes. et Str.)	ドヨウオニグモ
10. <i>N. scylla</i> (Karsch)	ヤマシロオニグモ
11. <i>N. scylloides</i> (Boes. et Str.)	サツマノミダマシ
12. <i>Argiope amoena</i> L. Koch	コガネグモ
13. <i>Cyclosa argenteoalba</i> (Boes. et Str.)	ギンメッキゴミグモ
14. <i>C. octotuberculata</i> Karsch	ゴミグモ
15. <i>Cryptarachne bufo</i> (Boes. et Str.)	トリノフンドマシ
16. <i>C. nagasakiensis</i> Strand	シロオビトリノフンドマシ
17. <i>C. nigra</i> Yaginuma	クロトリノフンドマシ
採集者は南部敏明氏（越生高等学校教諭）	
18. <i>Nephila clavata</i> L. Koch	ジロウグモ
19. <i>Leucauge subgemmea</i> Boes. et Str.	キララシロカネグモ
20. <i>Agelenia limbata</i> Thorell	クサグモ
21. <i>Coelotes insidiosus</i> L. Koch	シモフリヤチグモ
22. <i>Pardosa T-insignita</i> (Boes. et Str.)	ウヅキコモリグモ
23. <i>Oxyopes sertatus</i> L. Koch	ササグモ
24. <i>Misumessus tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ
25. <i>Tibellus</i> sp.	
26. <i>Jotus difficilis</i> Boes. et Str.	マガネアサヒハエトリ (M)
27. <i>Chiracanthium japonicum</i> Boes. et Str.	カバキコマチグモ

IV 名栗村（河又付近） 採集日：1970年7月27、28日

1. <i>Atypus karschi</i> Doenitz	ジグモ
2. <i>Uloborus sybotoides</i> Boes. et Str.	カタハリウズグモ (Y)

KISHIDAIA No. 39 1975, Mar.

3. <i>U. varians</i> Boes. et Str.	ウズグモ	
4. <i>Dipoena musterina</i> (Simon)	カニミジングモ	(S)
5. <i>Theridion chikunii</i> Yaginuma	バラギヒメグモ	(Y)
6. <i>T. japonicum</i> Boes. et Str.	ヒメグモ	
7. <i>T. tepidariorum</i> (C. Koch)	オオヒメグモ	
8. <i>Bathyphantes</i> sp.	クロテナガグモ?	(S)
9. <i>Neolinypbia fusca</i> Oi	クスミサラグモ	
10. <i>Plolinyphia longipedella</i> (Boes. et Str.)	アシナガサラグモ	
11. <i>Araneus ishisawai</i> Kishida	イシサワオニグモ	
12. <i>A. lugubris</i> (Walckenaer)	コゲチャオニグモ	(Y)
13. <i>A. uyemurai</i> Yaginuma	ヤマオニグモ	
14. <i>A. pseudocentrodes</i> Boes. et Str.	トガリオニグモ	(M)
15. <i>Neoscona scylla</i> (Karsch)	ヤマシロオニグモ	
16. <i>N. scylloides</i> (Boes. et Str.)	サツマノミダマシ	
17. <i>Zilla sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ	
18. <i>Cyclosa atrata</i> Boes. et Str.	カラスゴミグモ	
19. <i>C. octotuberculata</i> Karsch	ゴミグモ	
20. <i>C. sedeculata</i> Karsch	ヨツデゴミグモ	
21. <i>Meta reticuloides</i> Yaginuma	ヤマジドヨウグモ	(Y)
22. <i>Theridiosoma epeiroides</i> Boes. et Str.	カラカラグモ	
23. <i>Ogulnius pullus</i> Boes. et Str.	ヤマシグモ	
24. <i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma	オオシロカネグモ	
25. <i>L. subgemmea</i> Boes. et Str.	キララシロカネグモ	
26. <i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch	アシナガグモ	
27. <i>Agelena limbata</i> Thorell	クサグモ	
28. <i>Dolomedes saganus</i> Boes. et Str.	スジアカハシリグモ	
29. <i>Tmarus piger</i> (Walckenaer)	トラフカニグモ	
30. <i>Evarcha albaria</i> (L. Koch)	マミジロハエトリ	(M)
31. <i>Myrmarachne japonica</i> (Karsch)	アリグモ	
32. <i>Silerella vittata</i> (Karsch)	アオオビハエトリ	
33. <i>Clubiona</i> sp.		

V 簾能市(矢嵐)

採集日：1970年7月29日

1. <i>Erigone prominens</i> Boes. et Str.	ノコギリヒザグモ	(S)
2. <i>Oedothorax insecticeps</i> Boes. et Str.	セスジアカムネグモ	(S)

3. <i>Araneus abscissus</i> (Karsch)	キザハシオニグモ	(Y)
4. <i>Argiope bruennichi</i> (Scopoli)	ナガコガネグモ	
5. <i>Cyclosa algenteoalba</i> Boes. et Str.	ギンメッキゴミグモ	
6. <i>Gasteracantha kuhlii</i> C. Koch	トゲグモ	
7. <i>Clubiona</i> sp.		
8. <i>Orthobula crucifera</i> Boes. et Str.	オトヒメグモ	

VI 奥秩父(十文字小屋付近)、中津峠 採集日：1970年8月1～3日

1. <i>Ariamnes cylindrogaster</i> Simon	オナガグモ	
2. <i>Dipoena castrata</i> Boes. et Str.	ボカシミジングモ	(Y)
3. <i>Theridion chikunii</i> Yaginuma	バラギヒメグモ	
4. <i>T. yunohamense</i> Boes. et Str.	ユノハマヒメグモ	(S)
5. <i>T. rapulum</i> Yaginuma	ギボシヒメグモ	
6. <i>T. tepidariorum</i> (C. Koch)	オオヒメグモ	(Y)
7. <i>T. takayense</i> Saito	タカユヒメグモ	
8. <i>Nesticus</i> sp.		(S)
9. <i>Labulla</i> sp.	アショレグモ?	(S. M)
10. <i>Neolinypbia angurifera</i> (Schenkel)	ハンモックサラグモ	(Y)
11. <i>Plolinyphia</i> sp.		(S)
12. <i>Meioneta</i> sp.		(S)
13. <i>Erigonidium nigriteminorum</i> Oi	ハシグロナンキングモ	(S)
14. <i>Oedothorax insecticeps</i> Boes. et Str.	セスジアカムネグモ	
15. <i>Araneus triguttatus</i> Fabricius	マメオニグモ	(S. Y)
16. <i>A. displicatus</i> Hentz	ムツボシオニグモ	
17. <i>A. semilunaris</i> (Karsch)	マルヅメオニグモ	(S)
18. <i>Neoscona mellotteei</i> (Simon)	ワキグロサツマノミダマシ	
19. <i>Zygiella montana</i> (C. Koch)	ヤマキレアミグモ	(Y)
20. <i>Zilla sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ	
21. <i>Meta menardi</i> (Latreille)	サンロウドヨウグモ	
22. <i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma	オオシロカネグモ	
23. <i>Leucauge subgemmea</i> Boes. et Str.	キララシロカネグモ	
24. <i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch	アシナガグモ	
25. <i>T. squamata</i> Karsch	ウロコアシナガグモ	(S. Y)
26. <i>Menosira cericea</i> (Saito)	キヌキリグモ	
27. <i>Agelenopsis opulenta</i> C. Koch	コクサグモ	(Y)

28. <i>Coelotes</i> sp.		
29. <i>Pirata</i> sp.		
30. <i>Misumenops japonicus</i> (Boes. et Str.)	コハナグモ	
31. <i>Synaema takashimae</i> (Uyemura)	アマギエビスクモ	
32. <i>Carrhotus xanthogramma</i> (Latreille)	ネコハエトリ	
33. <i>Pellenes ususudi</i> Yaginuma	ウススジハエトリ	(M)
34. <i>Philodromus</i> sp.		

※の採集場所は中津峠である。

VI 滑川村(森林公園)	採集日: 1970年12月8日	
1. <i>Miagrammopes orientalis</i> Boes. et Str.	マネキグモ	
2. <i>Pholcus crypticolens</i> Boes. et Str.	ニウレイグモ	
3. <i>Theridion latifolium</i> Yaginuma	ヒロハヒメグモ	(S. M)
4. <i>T. octomaculatum</i> Boes. et Str.	ヤホシヒメグモ	
5. <i>T. subpallens</i> Boes. et Str.	ハイイロヒメグモ	(M)
6. <i>Linyphia oidedicata</i> (Helsdingen)	ヘリジロサラグモ	(S)
7. <i>Prolynypbia</i> sp.		
8. <i>Meioneta</i> sp.		
9. <i>Ostearius melanopygus</i> (P. Cambridge)	スゾグロサラグモ	(S)
10. <i>Solenysa mellootteei</i> Oi	アリマネグモ	(S)
11. <i>Tetragnatha squamata</i> Karsch	ウロコアシナガグモ	
12. <i>Dolomedes sulfureus</i> L. Koch	イオウイロハシリグモ	
13. <i>Oxyopes sertatus</i> L. Koch	ササグモ	
14. <i>Philodromus auricomus</i> L. Koch	キンイロエビグモ	(S. M)
15. <i>Philodromus spinitarsis</i> Simon	キハダエビグモ	
16. <i>P. subaureolus</i> Boes. et Str.	アサヒエビグモ	
17. <i>Tibellus tenellus</i> (L. Koch)	シャコグモ?	
18. <i>Carrhotus xanthogramma</i> (Latreille)	ネコハエトリ	
19. <i>Jotus abnormis</i> Boes. et Str.	チャイロアサヒハエトリ (M)	
20. <i>Menemerus pullus</i> (Karsch)	ヨダンハエトリ	
21. <i>Silerella vittata</i> (Karsch)	アオオビハエトリ	
22. <i>Clubiona vigil</i> Karsch	ムナアカフクログモ	
23. <i>Trachelas japonicus</i> Boes. et Str.	ネコグモ	(S. M)

ハエトリグモの分類

——その歴史・体系に関する2・3の知見——

松本 誠治

(杏林大学医学部生物学教室)

現在のイメージによるハエトリグモが、命名上独立したのは、1804年、Latreille がそれまで全て *Aranea* あるいは *Araneus* とされていたハエトリグモを一部まとめて *Salticus* 属のもとにおいたのがはじまりである。この属名が現在のハエトリグモ科すなわち *Salticidae* を作るもとにになっているわけであるが、Peckham などが使った *Attidae* もハエトリグモ科の名称である。*Attidae* は1805年、Walckenaer が Latreille と同じように、ハエトリグモを *Aranea* から分離したときに命名した *Attus* がもとになっているのであるが、現在は命名年による先取権のこともあり、*Salticidae* におちついている。Roewer (1954) をみると、*Attus* という属名は有効になっていない。当時 *Attus* に含まれていた種は、その後属が新設されるにつれて、模式種となったり、属名変更を受けたりして姿を消してしまっている。

その後、だんだんに属が新設され、現在では、400属、約4000種を持つ大世帯となっている (Prószyński, 1971)。しかし、この400属の中には、模式種のみからなる属が多数含まれていて、反対に非常に広い意味を持つ属のためにか、含まれる種の数が250種を超えているものもある。そしてまた、その種のうちの多くが、新種として記載されて以来、全く記録されていないという場合も多い (Bonnet, in: Prószyński, 1970)。模式種一種よりなる属、すなわち Monotypy による属（以下、単模式属と呼ぶ）は、1884年 Simon が、*Lycosocleisa* を作って以来、1885～1894年の10年間に15属、1895～1904年に48属、1905～1914年に22属、1915～1924年に5属、1925～1934年に21属、1935～1944年に32属、1945～1951年に22属、合計166属がある (Roewer, 1954)。これらのとりあつかいについては、Monotypy を認めるか否かという系統学上の問題があるが、単模式属は原則として認めないとする立場にたって、これら166属をとりあえず近似の属の下においたならば、ハエトリグモ科の分類もかなりすっきりするのではないかと思う。ちなみに、1883年まで（単模式属が作られるまえ）に存在していた属の数は66属、単模式属が作られてからの単模式属でない、すなわち複数の種を持っている属の新設は、1884年に5属、1885～1894年に54属、1895～1904年に147属、1905～1914年に6属、1915～1924年に3属、1925～1934年に7属、1935～1944年に8属、1945～1951年に7属、合計237属であった (Roewer, 1954)。

また、Prószyński (1968a・b, 1971) が強調するように、Simon のハエトリグモ分類の立場すなわち上顎後牙堤歯の数と形によって裂歯・単歯・多歯類にわけることをやめたなら、この400属は、単純計算でなら3分の1に減らすことができ、これまたすっきりするだろう。勿論、3分の1にはなりはしないが、かなり整理され減少することは明白である。Simon によって創設さ

KISHIDATA No.39 1975, Mar.

れ、その後、Peckham, Petrunkevitch 等によって使用されてきた上顎後牙提歯による分類は、人為的であるとみとめられながら、長年他の分類学者にも使われて来たが、近年ハエトリグモの分類に着手した、Proszyński (1968a・b) は、この人為的な分類法を無視して属の検討を行ない、*Viciria* 属、*Schenkelia* 属などの検討では、具体的に新らしい立場を表明している。この Proszyński の態度については、その勇気と決断と模式標本の再記載を行なっている熱意とを高く評価したい。日本産ハエトリグモにおいても、牙提歯による区分けが、人為的であることを支持するデータがある。ウデブトハエトリ *Harmochirus brachiatus* とその近似種についてであるが、前者ウデブトハエトリは、裂歯のハエトリグモで、本属の模式種になっている。それと非常によく近たハエトリグモに、単歯のものがあり、この *Harmochirus* 属に似た単歯ハエトリの属は、*Bianor* 属となっている。この 2 種は、上顎後牙提歯・腹部の斑紋の有無・大きさおよび体毛の量によって区別される以外、より本質的である生殖器の構造・装饰毛の分布状態・眼の配列については属を違えるだけの差をもたない。特に雌雄の生殖器の構造の基本的状態はよく似ており、これら 2 種を同属とする方が自然であることを示している。Proszyński (1968a・b) は、単歯と裂歯は同種間における個体変異および同一個体間における左右上顎でも変異があることを示し、この標徴による区分を無意味なものとした。これをみると、単歯と裂歯の差は種の差にもならないことを示している。ただ、多歯性については、それが種差となるか属差となるか、あるいは上記の例と同様、無意味な形態であるかは今後の課題として残っている。

このような形態の評価の問題は、ハエトリグモの分類だけでなく、他のクモひいては、他の動物および植物にもあてはまることであろう。筆者は先きに、分類学について、少し自身の考えを述べておいた（松本、1974）。そのときの内容を要約すれば、次の 5 項目になる。

1. 分類学は单なる分類とはちがうこと。
2. 分類学とは、生物の標徴を評価し、それに従って生物を整理する学問であること。
3. 評価の基準は、生物の進化過程であるけれども、分類学は進化過程を研究するときの横糸であって、縦糸である系統学との関連を忘れてはならないこと。
4. 分類学も自然科学の一分野であるから、科学の方法をもっていなければならぬし、また客観的であり実践的でなければならないこと。
5. 分類学独自の方法は、命名法であって、これを大切にしなければならないこと。

この要約の第 2 項に関して、クモの分類標徴としての形態をかぞえ、90近くあることを指摘し、この 1 つ 1 つについて実際の標本に基づいて系統学的評価をした上で、分類標徴として取捨選択していく必要があるとした。あまりにもたいくつな仕事であるけれども、やはり「分類学」の大きな仕事であると考えている。これに關し形態の全てを記載する必要はないという指摘を受けたが、これは、ある分類単位（種や属など）の分類・記載を実際にするときのことであり、筆者のいう 1 つ 1 つというのは、ある分類単位のもつ分類標徴は、それぞれ系統学をふまえた分類学的な評価を必要としているということである。この評価によって、その分類群・分類単位で無意味になったものはいちいち記載する必要は全くなく、それを記載するのは個体変異も考えに入れない「下手な鉄砲も數をうてば当

る」というたぐいの態度であると思う。また、第4項目に関し、例をあげれば、Galiano や Proszynski は、眼域のいくつかの場所の長さをそれぞれの間および頭胸部との間の比率に換算し、また、第3脚脛節長に対する第4脚脛節長の比も数値化している。これは、客観化ということすぐれた方法であると考えるが、やはり個体変異の幅を考慮しなければならないことと同時に、系統学的検討も伴なわなければならないと思う。それについては、Proszynski (1971) は材料不足を述べて、明確な結論を出していないが、技術としてもかなり実用的であって今後のハエトリグモの分類に、より重要な標徴となると考える。

日本産ハエトリグモの模式標本のほとんどが、国外にあり、国内のものも第2次世界大戦の結果なくなってしまい(高島、1956)、また管理・保存するべき機関等の不備のため十分に活用される状態にないことは残念である。今後の属の検討のために、日本産ハエトリグモの各属の模式種を列挙しておく。ここにあげた属名は、八木沼(1970)に記録されたハエトリグモ科の各属で、以後追加・変更されたものについては適宜掲げた。コロンの左側は属名、右側はその属の模式種である。

- Aelurillus* Simon, 1884 : *Araneus litera-v-insignitus* Clerck, 1758
Anarrhotus Simon, 1902 : *Anarrhotus fossulatus* Simon, 1902
Ballus C. L. Koch, 1850 : *Aranea chalybeia* Walckenaer, 1802
Bianor Peckham, 1886 : *Scythoropa maculata* Keyserling, 1883
Boethus Thorell, 1878 : *Boethus spinimanus* Thorell, 1878
Breda Peckham, 1894 : *Marpissa milvina* C. L. Koch, 1846
Carrhotus Thorell, 1891 : *Plexippus viduus* C. L. Koch, 1846
Chalcoscirtus Bertkau, 1883 : *Callietherus infimus* Simon, 1868
Chrysilla Thorell, 1887 : *Chrysilla lauta* Thorell, 1887
Cosmophasis Simon, 1901 : *Plexippus thalassina* Simon, 1846
Dendryphantes C. L. Koch, 1837 : *Araneus hastatus* Clerck, 1758
Euophrys C. L. Koch, 1837 : *Salticus maculata* Wider, 1834
(= *Aranea frontalis* Walckenaer, 1802 カタオカハエトリ)
Evarcha Simon, 1902 : *Araneus flammata* Clerck, 1758 ホホジロハエトリ
Harmochirus Simon, 1885 : *Ballus brachiatus* Thorell, 1877 ウデブトハエトリ
Hasarius Simon, 1871 : *Attus adansonii* Audouin, 1827 アダンソンハエトリ
Heliophanus C. L. Koch, 1837 : *Aranea muscorum* Walckenaer, 1802
Hyctia Simon, 1876 : *Salticus nivoyi* Lucas, 1846
Hyllus C. L. Koch, 1846 : *Hyllus giganteus* C. L. Koch, 1846
Icius Simon, 1876 : *Attus notabilis* Simon, 1871
Jotus L. Koch, 1881 : *Jotus auripes* L. Koch, 1881
Laufelia Simon, 1888 : *Laufelia aenea* Simon, 1888 エキスハエトリ
Linus Peckham, 1885 : *Salticus fimbriatus* Doleschall, 1859 ケアシハエトリ

- Maevia* C. L. Koch, 1848 : *Attus vittata* Hentz, 1846
Marpissa C. L. Koch, 1846 : *Araneus muscosa* Clerck, 1758 コケハエトリ
Menemerus Simon, 1868 : *Attus semilimbatus* Hahn, 1829
Mithion Simon, 1884 : *Mithion semiargenteus* Simon, 1884
Modunda Simon, 1901 : *Modunda phragmitis* Simon, 1901
Myrmarachne Macleay, 1839 : *Myrmarachne melanocephala* Macleay, 1839
Neon Simon, 1876 : *Salticus reticulatus* Blackwall, 1853 ネオンハエトリ
Orthrus Simon, 1900 : *Orthrus bicolor* Simon, 1900 ニシキリセイハエトリ
Pellenes Simon, 1876 : *Aranea tripunctata* Walckenaer, 1802
Phidippus C. L. Koch, 1846 : *Salticus variegatus* Lucas, 1833
Phintella Strand, 1906 : *Phintella typica* Strand, 1906 日本産・和名なし
Plexippus C. L. Koch, 1846 : *Attus paykullii* Audouin, 1827 チャスジハエトリ
Rhene Thorell, 1869 : *Rhanis flavigera* C. L. Koch, 1848
Siler Simon, 1888 : *Siler cupreus* Simon, 1888 アカガネハエトリ
Silerella Strand, 1906 : *Silerella barbata* Strand, 1906 メグロハエトリ
Sitticus Simon, 1901 : *Araneus terebratus* Clerck, 1758
Synagelides Strand, 1906 : *Synagelides agoriformis* Strand, 1906 アメイロハエトリ
Telamonia Thorell, 1887 : *Telamonia festiva* Thorell, 1887

和名のついているものは、日本産の種として記録されているものであるが、これについてもハエトリグモ科ではいくらかの問題がある。1つには、日本産のものが本当にその種としてよいものかという疑問である。現実に、日本産ハエトリグモのいくつかは属名変更を受けているのである(Proszynski, 1973)。この初步的段階から、日本のハエトリグモは検討されねばならない状態なのである。しかし、いくつかの属の模式種が日本にいるということは、ハエトリグモの分類にとっては好都合であり、今後の検討の突破口にもなると考えている。

引用文献

- 松本誠治(1974) 分類学について、三会合同例会にて口述発表(22-1974・日馬)
- Proszynski, J. (1968a) Redescriptions of type-species of genera of Salticidae (Araneida). *N. Sehenkelia modesta* Delessert, 1927. *Annal. Zool.* (Polska Akad. Nauk, Inst. Zool.), 26(6): 217-221
- (1968b) Redescriptions of type-species of genera of Salticidae (Araneida). *Viciria pavesii* Thorell, 1877, and discussion of the taxonomic value of some criteria. *Ibid.*, 26(8): 239-244.
- (1970) The Systematic Problems of Salticidae in a Light of the Survey of Major Collections of the world. *Bull. Mus. Natn. Hist. Nat.*,

scr. 2 e, 41 (suppl. 1) : 161-165

——— (1971) Notes on systematics of Salticidae (Arachnida, Aranei).

I. Suggestion on more natural subdivision of the Salticidae family.

Annal. Zool. (Polska Akad. Nauk, Inst. Zool.), 28 (12) : 227-233

——— (1973) Systematic studies on East Palaearctic Salticidae,

II. Redescriptions of Japanese Salticidae of the Zoological Museum in Berlin. Ibid., 30(5) : 97-128

Roewer, C. Fr. (1954) Katalog der Araneae, von 1758 bis 1940, bzw. 1954.,

2 Band. Abt. b : 927-1751, Inst. royal Sci. nat. Belgique (Bruxelles)

高島春雄 (1956) 日本に現存する蜘蛛類関係の模式標本 (Type) の一覧 (I). 動物分類学会会務報告, (12) : 5-11

八木沼健夫 (1970) 日本の真正蜘蛛類相. 国立科学博物館研究報告, 13(4) : 639-701

お便りの中から

……青森地方は一面の銀世界です。 (中略) 晴れた日に (風が少しあった方が良いようです。) 雪の上に出てみると ballooning で飛んで来た蜘蛛でしょうか? 小さな蜘蛛を雪の上に多数見る事が出来ます。大抵は歩脚をちぢめて小さくなっています。やがて雪がその上から降り、夜が来てカチンカチンに氷つく寒さが来るのかと思うと、そして広い雪原を見ると蜘蛛とは悲しい生物だだなあと思います。風の通り道に置いてあった車のシートにひっかかった? 蜘蛛を採集して見ました。小さいが美しい蜘蛛が多い様です。残念ながら私の力では同定できません。この時採集した蜘蛛はカニグモ科のものが目をひきましたが、ハエトリグモ科のものは含まれていませんでした。おもしろいと思ったのは雪の上は意外にもたくさんの虫がいる事です。

(高橋米夫)

八重山群島のクモ類

大利昌久

(東京大学医科学研究所 寄生虫研究部)

1972年3月15日から4月9日の25日間、沖縄の最南端、八重山群島の西表島、石垣島、与那国島の3島におけるクモ類の調査をおこなった。採集目録は西表島45種、石垣島40種、与那国島30種で、総計3島で21科、70種のクモ類が記録された（別報予定）。そのうち生態学的に興味ある習性について記録した成績を報告する。

1. トゲゴミグモ *Cyclosa mulmeinensis* (Thorell, 1887)

野椰子の樹幹、蘇鐵の葉、パイナップル畑や雑草の間に広く分布している。山間部から海岸部に普通種。成体は比較的表面近くにキレ網を張っている。キレ網のキレ糸の部分に4~6コの卵袋を吊っている。網は水平のも見られるが、傾斜及び縦網が多い。宿主は網の中央部に占座し、下向きが多いが、上向き、横向きのものいる。危険を感じると歩脚を縮め、盛んに体を前後にゆすって示威運動をおこなう。あるいは、網より糸を垂れ、急速に落下し偽死行為を行う。卵袋はベージュ色をし幼虫垂状である。卵袋内には幼虫が入っており、卵袋内で越冬するらしい。丁度交接期で、成熟した雄が、雌の網の外枠糸に1~2匹接近していた。雄が雌の成熟より早い。本種の幼虫は、キレ網でなく完全円網を張っている。亜成体も完全円網を張ることが多い。この円網の12時、6時の個所、あるいは3時と9時の個所など、ほぼ対称の位置に座塊を付している。これは外敵のカモフラージュの役を果たすらしい。座塊は食物残渣を軽く糸で丸めたものである。

3月31日から台風来襲の報。その頃から強風が吹きはじめたが、宿主は縦糸と枠糸を残し横糸を解体しはじめた。

2. ナガマルコガネグモ *Argiope aemula* (Walckenaer, 1873)

他のコガネグモ類と同様、白帯のある円網を張るのが普通である。白帯は斜線状、X字状であった。円網の表裏に外枠糸を張りめぐらし、ジョロウグモにみられる三重構造の網もみられた。この三重構造の網は他に、ゴミグモの一種でみたことがある（インド亜大陸、1970年5月）。本種は渡瀬線以南に分布し、広く熱帯地方に普通種とされている。

3. ハツリグモ *Acusilas coccineus* Simon, 1895

普通キレ網形のキレ込みの基線から巻葉を吊るが、当地で記録した宿主は、縦糸14本、横糸32本、基線がなく、数十本の支柱糸を複雑に張りまわしている珍奇な構造をしていた。

4. アシナガグモ *Tetragnatha praedonia* L. Koch, 1877

円網の中央に枝を利用した心棒付円網を2例観察す。以前平戸島で記録し(ATYPUS, 1630)、疑問に思っていたが、今般の観察で、亜成体のアシナガグモが、時としてこの種の網を張ることが判明した。宿主は心棒状の枝に潜む。大久保氏によって同様の報告がなされている(ATYPUS, 1660)。

5. スナハラコモリグモ *Lytosa takahashii* Saito, 1936

海浜に多数徘徊す。時折カニの巣穴に落ち込んでは、あわてて這いあがろうとしている光景に出会った。台湾種とされている。

6. トタテグモの一一種 *Latouchia* sp.

湿気をおびた粘土質に横穴式住居を営む。坑道の長さは6~11cmあり、わが国に既知のトタテグモ類の3倍から5倍の長さがある。坑道の奥に曲がりがみられることが多い。入口に扉があり、扉附近は糸で裏うちしてある。

7. ジョウゴグモの一一種 *Macrothelus* sp.

粘土質の瓦礫の隙間に造網。網は漏斗状で宿主は漏斗部の基部に潜む。基部は土塊の中にまで続いている。又、3~5cm程の坑道もみられる。極めて敏捷である。偽死行為も行う。

8. 不明グモの卵のう

白い巾のある帶糸で卵のうを吊っている。2~3ヶ一緒に吊っている場合が多い。卵のうの表面は湿った土の塊で被われている。卵のう自体の直径は1.5~2mm、表面の土の部分を合わせると3~4mmの小さなもの。卵のうは白色である。袋を破ると既に孵化した仔グモが出てきた。数は17~24匹であった。

真正クモ類の生態資料(南西諸島編)

太 利 昌 久

(東京大学医科学研究所 寄生虫研究部)

(1) 人家内にみられるクモ類

人家内にみられるクモ類は、人家内で発生乃至は発育するハエ類、ゴキブリ類などの衛生害虫を捕えるために侵入する例が多い(太利、1974)。本報では沖縄本島(1972)、八重山群島(1972)、奄美大島(1974)の人家内でみられたクモ類の調査資料を報告する。下記に示すように奄美大島の人家から9科、14属、16種、沖縄本島から8科、10属、10種、八重山群島から10科、10属、15種が記録された。

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

奄美大島 (9科、14属、16種)

カタハリウズグモ、ウズグモ、チリグモ、ニカタヤマシログモ、イエヌウレイグモ、オオヒメグモ、イエオニグモ、ヤマシロオニグモ、トゲオニグモ、スズミグモ、シロガネイソウロウグモ、イエタナグモ、アダンソンハエトリグモ、チャスジハエトリグモ、デニッツハエトリグモ、アシダカグモ

沖縄本島 (8科、10属、10種)

ウズグモ、チリグモ、オオヒメグモ、イエヌウレイグモ、ヤマシロオニグモ、トゲオニグモ、トゲゴミグモ、イエタナグモ、ヒラタグモ、チャスジハエトリグモ

八重山群島 (10科、10属、15種)

ミナミウズグモ、ウズグモ、カタハリウズグモ、チリグモ、クロヤマシログモ、ニカタヤマシログモ、ヤマシログモ、イエヌウレイグモ、ユウレイグモ、オオヒメグモ、トゲゴミグモ、イエタナグモ、アサヒエビグモ、アオオビハエトリグモ、アシダカグモ

表1は南西諸島各地と九州（長崎県）（1954～1964）の人家内でみられたクモ類を科別に比較したものである。

Table 1 Spiders in houses in various districts

of Nansci islands and kyushu

Area	Kyushu	Amami	Okinawa	Yayeyama	
Uloboridae	1	2	1	3	
Oecobidae	1	1	1	1	
Scytodidae	2	1	0	3	
Pholcidae	1	1	1	2	
Theridiidae	1	1	1	1	
Argiopidae	1	5	3	1	
Urocteidae	1	0	1	0	
Agelenidae	1	1	1	1	
Thomisidae	0	0	0	1	
Salticidae	6	3	1	1	
Clubionidae	1	0	0	0	
Selenopidae	1	0	0	0	
Heteropodidae	2	1	0	1	
Gnaphosidae	1	0	0	0	
Total number	20	16	10	15	

(2) 畜舎内でみられたクモ類と個体数

奄美大島古仁屋の牛舎、豚舎内でみられたクモ類は表2に示すとおりである。調査時期は1974年6月5日である。

Table 2 Number of spiders in the animal-sheds
in Amami islands (1974)

Spider species	Number of spiders recorded in a cow-shed in a pig-shed	
<i>Uloborus geniculatus</i>	16	0
<i>Pholcus phalangioides</i>	2	0
<i>Theridion tepidariorum</i>	14	10
<i>Argiope bruennichi</i>	4	0
<i>A. minuta</i>	0	3
<i>Cyrtophora moluccensis</i>	18	24
<i>Gastrocantha kuhlii</i>	24	39
<i>Nephila clavata</i>	7	24
<i>N. maculata</i>	4	8
<i>Conopistha (argyrodes) bonadea</i>	0	32
<i>Uroctea compactilis</i>	0	4
<i>Oxyopes badius</i>	0	1
<i>O. macilentus</i>	0	1
<i>O. sertatus</i>	0	4
Gen. et. sp. indet. (Ibokanigumo)	0	1
<i>Hasarius adnasoni</i>	1	0
<i>Menemerus confusus</i>	0	2
<i>Plexippus paykulli</i>	25	32
<i>Heteropoda venatoria</i>	1	1
Total number	116	187

参考文献

大利昌久(1974)衛生害虫の天敵としてのクモ類 1. 長崎県の家屋内に棲むクモ類の観察
衛生動物 25(2): 153-160

キシノウエトタテグモに寄生する冬虫夏草について

高 橋 登

クモや昆虫に寄生して寄主を殺し死体の一部から棍棒状の子実体「子座」を発生する菌を冬虫夏草と呼び多くの種類がある。私が観察したのは、クモタケ *Isaria atypicola* Yasuda と呼ばれている不完全菌である。

昭和47年5月18日

川崎市内の丘陵で初めてキシノウエトタテグモを採集した。その時私はカネコトタテグモの写真を撮りに来ていたのであるが、表面にコケを付けた特徴ある戸蓋を見つめた。写真を撮り掘り出すと♀の幼体であった。

6月1日

いままでは、カネコトタテグモを観察するため丘陵の北側ばかりを歩いていたが今度は同じ丘陵の南側斜面を調べてみた。そしてすぐにキシノウエトタテグモの住居を見つけることができた。一つ住居が見つかるとその付近にコロニーを作っている大小多数の住居を観察することができた。

川崎市においてキシノウエトタテグモが住居を作っている地質は関東ローム層であり乾燥している。樹木の根本にも住居を作り生活しているが、日光の直接当る斜面に多く、戸蓋はゴミやコケで巧みにカムフラージュされており南向きに開口する。

6月10日

住居入口付近で菌に寄生され全体が白い菌糸で被われているクモが見られた。クモの体は菌糸で満たされ腐敗もせずミイラ状になっている。この状態の時には戸蓋がしまっているため外からは見えない。

6月12日

6月1日に採集し飼育中のキシノウエトタテグモがケース内で白い菌糸に被われていた。細野善照氏の「蜘蛛の習性」にも早春この蜘蛛を採集して消毒した土に巣を造らせガラスの容器を閉じておいてもキノコは発生してしまうと書いてあるが、同じ飼育ケース内のカネコトタテグモは活発に動きまわっている。

6月17日

戸蓋を押し上げて子実体を10mmばかり地上に伸ばしているものが見られた。子実体は棍棒状でク

その頭胸部より生じている。先端部の結実体は淡紫色である。

7月13日

先端部より分生胞子をまき散らしているクモタケが見られ現在までに6個体のクモタケを観察することができた。クモはすべて住居入口付近で菌に寄生されている。クモタケは寄主体であるクモの幼体・成体にかかわりなく寄生し、また子実体は1本であるが2本伸びているものも1例だけあった。

8月12日

キシノウエトタテグモの住居に卵のうが見られた。卵のうは住居の中ほどに置かれクモはその上に脚を広げて保護している。

10月15日

キシノウエトタテグモの住居内に親と同居している幼体が見られた。

昭和48年6月20日

クモタケを採集する。柄部の長さ約7mm結実部の長さ5mmほどであった。飼育ケース内に置いたが6月23日には、柄部の長さ10mm結実部の長さ1mmほどに成長していた。結実部の表面は分生胞子に被れ基部はやや太く寄主体を包蔵している。

6月27日

6月20日に採集したクモタケは分生胞子をまき散らしている。子実体が成長して枯れるまでの期間は約2週間である。クモタケに養分を吸収されたクモは、完全に分解され頭胸部の外形と脚が見分けられる程度である。

分生胞子をまき散らすとクモタケの菌核、柄部は、急速に萎縮し纖維質が細い糸のように残っている。

クモタケがキシノウエトタテグモに寄生する確率は比較的高いものと思われる。私が観察した地域は非常に狭い範囲であったが毎年多くのクモタケが発生している。

いつどのようにして菌がクモの体に寄生するのかは不明である。住居の構造・習性に関係があると思われるのだが…………。

クモタケは有名であるが実際に見たことのある人は少ないとと思う。最近の開発によって生活環境が破壊されクモタケの寄生主であるキシノウエトタテグモが急速に減少してしまったからである。川崎市内においてもキシノウエトタテグモの減少は著しく社寺の境内や市北部の丘陵地帯にわずかに残っているにすぎない。クモ愛好者にとって興味ある生態を持つクモがだんだんと減ってゆくのは残念なことである。

KISHIDAIA 1639 1975, Mar.

小観察あれこれ(4)

高野伸二

◎においを出すトリノフンダマシ類

葉のうらにいるトリノフンダマシやオオトリノフンダマシをつついで、糸をひいて落ちて来た時、手の平に受けると、淡褐色の液を出すことが多い。つかんだり、つついたりすると、こん虫では口から液を出すものが多いが、液と体の位置から見て、トリノフンダマシの場合も口から液を出していると思われる。

この液はちょうどテントウムシの出す液とよく似たにおいがする。私の感じでは、オオトリノフンダマシとトリノフンダマシではにおいが少し異り、オオトリノフンダマシの方が、テントウムシに似ているように思う。ところでオオトリノフンダマシの腹部下側は黒くて扁平で、テントウムシの腹部と似て見える。手に受けた時にオオトリノフンダマシがうらがえしになっていて、しかも悪臭の液を出していると、テントウムシに似ていると思ったことが何回かあった。一方、アカイロトリノフンダマシやサカグチトリノフンダマシは全体の形や色がテントウムシによく似ていることは知られているが、本年採集したアカイロトリノフンダマシやソメワケトリノフンダマシを管びんに入れておくと、エーテルのような強いにおいを出すことを知った（液を出すのは見ていない）。

フィリピンでは、悪臭を出すテントウムシの幾つかの種にそれぞれ擬態しているゴキブリがいるそうであるが、クモの中にテントウムシに擬態しているものがいてもおかしくはないであろう。まあ擬態のこととはとも角として、トリノフンダマシ類がにおいを出すことについて、他の人にも確認してほしい。サカグチトリノフンダマシではどうであろうか。

◎ドヨウォニグモの平行腹位占座

1974年6月23日、千葉県一の宮の海岸に近い草原で多数のドヨウォニグモ成体が造網していた。垂直円網のものが多かったが、水平円網のものも相当数あり、中央に白い円形のかくれおびをつけるものがあり、更に水平円網に平行腹位に（つまり動物がはうように）占座するものが10ヶ体以上もいたので、大変興味深く思い、カラーにて撮影した。このように平行腹位に占座する円網作製者はマルゴミグモ以外知らなかった。時間は正午過ぎから午後2時頃までであった。

この観察をしてから数日後に Atypus 62号が届き、中平清先生が高知県でドヨウォニグモの平行腹位占座の観察をなさり、細かい考察を加えておられるのを知り、びっくりし、又敬服した。この場所へはこのシーズン、とうとう再訪する機会がなかったが、本年は同じ頃行って、くわしい観察をしてみたい。

◎都下のソメワケトリノフンダマシ

7月24日、新海さんのおともをして、都下木下沢へ行ったところ、たまたまソメワケトリノフン

ダマシ1個体を見つけた。三重県以東でははじめて、もちろん都のニューレコード。

その後7月31日に3個体、8月6日1個体を木下沢で発見したが、その頃から9月にかけて訪れた都下や神奈川県の他の場所では1つも見られなかった。

◎ゲホウグモの卵のう

8月16日滝山へ行ったところ、クヌギの林縁のササの葉と、それより約60cmはなれたススキの葉に、ゲホウグモの卵のうが1つずつついていて、ササのものからは、すでに数百の子グモが出て団欒していた。オニグモの卵のうのようにふわふわした糸で包まれているが、白色で、外側にオレンジ色の糸がつけてある。18日にもこの子グモはかたまっていたが、22日にはすでに分散し、ススキのものから子グモが出始めていた。毎年のように9月から11月に、この場所でゲホウグモの幼生を発見するが、成体はどこにかくれてしまうのか。卵のうのまわりをいくらさがしても、ついにクモはいなかった。

◎アズチグモの体色変化

このクモには白いものと黄色のものとがあり、斑紋の多少にも変化が多い。大利昌久さんは、このクモが白から黄に変化したという報告をされている (Atypus 35号)。

8月16日、滝山で腹部の先端近くにわずかに褐色の斑のある淡黄色のアズチグモを採集して持ち帰り、管瓶に入れて机の上に放置しておいた。8月22日午前10時に見たところ白色になっていたのでびっくりした(褐色の斑には変化がなかった)。この個体を黄色のキクイモの花の上に放して銅って見たが、ついに黄色に変ることなく、31日に産卵し、9月9日死亡した。この体色変化についてはカラーにて撮影してある。

大利さんの例では、黄色のダリアに放した白いクモが黄色になったもので、いかにも保護色又は隠れ色のように思われるが、私の場合、逆に黄から白への変化で、条件としては大利さんの場合と同様の黄色の花上でも変化はなかった。自然条件下で、黄色の花と白いクモ、又はその逆の組み合わせの例が多いかどうかを再確認したい。

◎青森県下北半島のイソコモリグモ

9月5日、下北半島の鷹巣沼が太平洋に流れ出る附近の砂浜を歩いているコモリグモを探集した。腹部に黒色の特徴ある斑紋を持つ体長約7mmの幼生であった。その後大形シャーレの中で元気に生活し、9月18日には脱皮して体長9mm位になった。少量入れておいた乾いた砂を糸でつづって円形にし、その中央にいることが多かったから、自然状態ではあなをほる(少くとも脱皮の前に)のではないかと考え、砂を1cmの深さにしてやったら、シャーレのふちにそってあなをほり、あなたの入り口の砂を糸でつづっていた。驚くとあなの中にかくれるので、9月24日容器を深くし、砂を多量に入れてみたが、次第に弱って来て、28日に死んだ。このクモは新海さんに伺ったらイソコモリグモであるとのことで、日本海側からの報告のみで、太平洋側からは、はじめての記録ではないかとのことであった。

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

D R A G L I N E

カクレ帯をつけたヤマオニグモの幼生

松 本 誠 治

1974年4月2日、八王子市宮下町の林内で、高さ80cm程のところに、カクレ帯をつけた網を張ったヤマオニグモの幼生をみつけた。体長は約1.8cm。カクレ帯はクモの前後すなわち垂直に、中心から上下4cmずつあった。その近くの高さ50cm程のところに同じようにカクレ帯をつけた網があった。これも同じような大きさのヤマオニグモの幼生であった。ATYPUS 1637※をめくってみたが、ヤマオニグモの名は出ていなかった。

※中平清(1965) STABILIMENTUM の生態的意義 ATYPUS, (37):1-45

家屋の壁にあるきまわるオオハエトリ

松 本 誠 治

1974年8月3日から6日まで、富士山・富士吉田口を中心とかなり広汎に行動し、クモの採集を行なった。宿舎(富士屋旅館)に着いて、荷物を部屋におきひと息入れながらあたりをみまわすと、ハエトリグモが壁のあちこちにあるきまわっていた。正体はオオハエトリ(*Marpissa roemerii*)である。あちこちみたが、暖地の平地での家屋にみられるシラヒゲハエトリ、チャスジハエトリや東京でみられるミスジハエトリなどはみられず、このオオハエトリが我物顔であるきまわっている。千葉県では、オオハエトリは松の幹でみられ、家の壁にはシラヒゲハエトリ・チャスジハエトリがいたが、寒冷地ではそのニッチにオオハエトリが置換しているのだろうか。長野でも、このようなこと(小屋の外壁にオオハエトリを多くみつけた)があった。おもしろいことと思う。

八王子城趾クモ観察会のドウシグモ

小 野 展 嗣

昨年(1974)の5月12日に八王子城趾で行なわれた本会のクモ観察会に参加した際、松の大木の樹皮下よりウラシマグモのようなクモ(体長3mm)を採集した。家で詳しく調べたところ独特の形態を有するドウシグモ *Doosia japonica* (Boes et Str., 1906) であることがわかった。本種の採集記録は比較的少ないが、東京ではすでに35年前に深沢治男(1940)※によって都心(芝公園)で多数採集されたことが記録されている。しかし戦後は、最近千葉県の土氣から報告されている他は関東地方での記録は余り耳にしない。その生態は岸田久吉(1940)※※によれば、老木の樹皮下で晩秋から早春にかけて小さい糸製の袋の中で越冬していることが多い、と記されている。一生を樹上で生活するものだろうが、食性など詳しいことはわかっていないので注意が必要である。今回採集され



た個体は腹部背面後方の2白斑のうち前方のものが、岸田の図や図鑑のものより小さく白点状であった(図)。

※深沢治男, 1940. 芝公園採集真正蜘蛛目録. *Acta Arach.* 5(1): 19-24

※岸田久吉, 1940. ドウシグモとウチワグモに就て. *Acta Arach.* 5(2): 138-145

アリをきらうクモと好むクモ

小野展嗣

かつて、ジョロウグモの幼生(体長7mm)の網にクロヤマアリ(体長5mm)をかけてやったことがある。クモはすばやくアリに近づきとらえようとした瞬間アリが蟻酸を放ったらしく、クモはあわてて網の中央に退散し、しきりに上顎を動かし、脚の掃除をしていた。そのうちアリは網から落ちてしまった。それから10分程して、同じ網にまた別のクロヤマアリをかけたところ、今度はクモは警戒しながらゆっくり近づき、アリに触れることなく糸をはじいてアリを落としてしまった。そこで今度はヤブカ(体長5mm)をつかまえて羽を切って同じ網にかけたところ、サッと近寄り糸でぐるぐるまきにして中央にもどり食べ始めた(1968年6月6日、東京目黒にて観察)。この限りではジョロウグモはアリが苦手なのかと思ったが、それから1ヶ月程して10mmに成長したジョロウグモの網に小型のアリ(体長2mm、種類不詳)をかけたところ、上顎でかみつき中央に持つていって糸もかけずに食し始めた(7月22日観察)。管ひんで飼育しているクサグモやハグモやハエトリグモなどにアリをエサとして与えるときも食べる場合とクモが逃げまどう場合とあったが、一般にアリが大きいときらう傾向はあるようだ。しかし、アリの行列にわり込んでその幼虫をさらうアオオビハエトリの観察(城成治: *ATYPUS* (32): 11, 1964)やミシングモ類がアリを専門にねらう(?)こと、また外国にはアリの巣に共生するコサラグモのいることなどの事実もあり、アリとクモの関係を一概に説明することは容易でない。

オオヒメグモのえじきとなったクモ

小野展嗣

オオヒメグモは、下の方だけに粘球のついた糸を数本地上から網の上部へ引き地面をはっている虫をつり上げるという面白い捕食方法をもつクモである。その網の下を不運にも通りかかってオオヒメグモのえじきとなったクモを時折見かける。私の観察したのは、キシノウエトタテグモ(♂成体)、ミヤグモ(♂成体)、ヒラタグモ(♂成体)、ジョロウグモ(♀成体)、メガネヤチグモ(♂成体)の5例である。人家付近で、♀の網を求めてさまよう♂が多いようだ。

DRAGLINEへの投稿を歓迎します。せっかくの観察も報告記録せずに自己満足で終ってしまっては科学的に意味がありません。生態や分布など多くの目で観察を積み重ねることによって、より実に迫ることができます。本欄は埋もれてしまいそうな小さな観察も何とか記録としてとどめようという意図を持っています。

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

箱根畠宿付近の真正蜘蛛類

小林久俊 石山鉄幸 権田重雄

1.はじめに

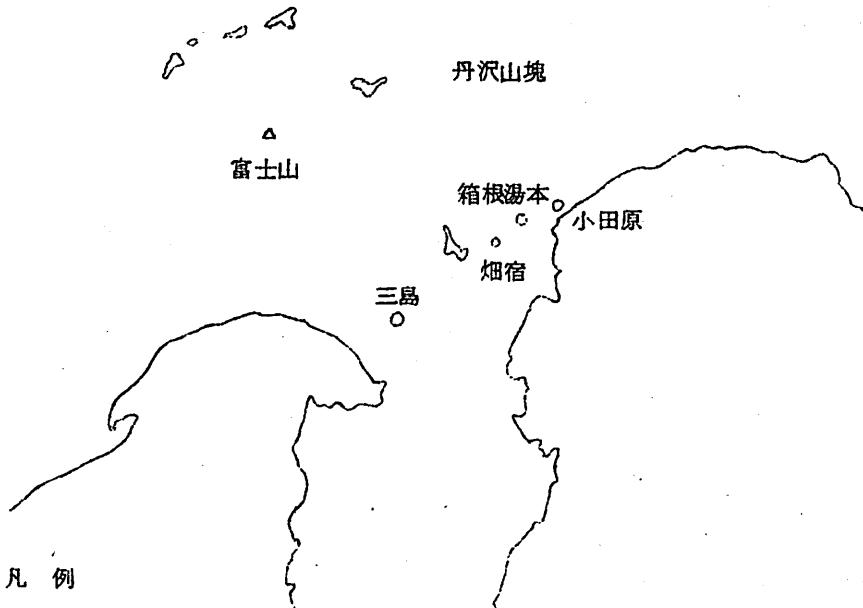
箱根は神奈川・静岡両県にまたがる山地帯で、地理的にも、又、クモの分布境界線として有名な植村線（ナカムラオニグモ線）が、ほぼこの付近を通っているなど分布的に興味深い位置にある。箱根におけるクモ相の研究については未だ十分になされていないが、富士山（岸田；1928, 関口；1940, 八木沼・西川；1973），丹沢山塊（山川・熊田；1973）の調査は行なわれている。筆者らは1969年より1973年まで、箱根畠宿における玉川大学生物自然研究会の調査において採集された真正蜘蛛類のうち、同定を終ったもの27科126種について目録を作成したのでこれを報告する。

なお、日頃から御指導いただき、文献等についてお世話をいただいた国立音楽大学の萱嶋泉博士にお礼申し上げます。また貴重な標本を提供して下さった、玉川大学生物自然研究会OBの山本佳範氏、高野光男氏、五木田恒二氏やその他の諸氏に感謝いたします。

2 採集場所・採集方法

採集は箱根畠宿にある玉川大学箱根実習林内において行なった。本実習林は箱根湯本よりバスで20分の所にあり、植生は、主として杉の植林と落葉広葉樹の2次林である。採集は、標高300～600m付近で年間を通して行なった。実習林内には溪流があり、ハコネサンショウウオが生息している。

採集方法は、おもにハンドソーティングで行ない、ビーティング・スィーピング・シフティングを随時行なった。冬期においてはツルグレンファンネルを使用した。



3.凡例

- ・科、属、種の配列は、日本の真正蜘蛛類相（八木沼；1970）に従った。
- ・種決定に至らぬ種類 (sp. indet.) は目録から除いた。
- ・同定は目録番号 126 以外、すべて筆者らが行った。
- ・重要種および記録の少ない種は、後に簡単な解説を付けた。
- ・今回、調査が不十分な為、地理的考察は行なわなかった。

4. 目録

	I ANTRODIAETIDAE	カネコトタテグモ科
1	<i>Antrodiaetus roretzi</i> (L Koch)	カネコトタテグモ
	II ATYPIDAE	ジグモ科
2	<i>Atypus karschi</i> Doenitz	ジグモ
	III ULOBORIDAE	ウズグモ科
3.	<i>Hypsiotes affinis</i> Boes. et Str.	オウギグモ
4.	<i>Miagrammopes orientalis</i> Boes. et Str.	マネキグモ
5.	<i>Uloborus sybotides</i> Boes. et Str.	カタハリウズグモ
6.	<i>U. varians</i> Boes. et Str.	ウズグモ
	IV SEGESTRIIDAE	エンマグモ科
7.	<i>Ariadna lateralis</i> (Karsch)	ミヤグモ
8.	<i>Segestria komatsuana</i> Komatsu	コマツエンマグモ
	V OONOPIDAE	タマゴグモ科
9.	<i>Ischnothyreus narutomii</i> (Nakatsudi)	ナルトミダニグモ
	VI PHOLCIDAE	ユウレイグモ科
10.	<i>Pholcus crypticolens</i> Boes. et Str.	ユウレイグモ
11.	<i>Spermophora akebona</i> Komatsu	アケボノユウレイグモ
	VII THERIDIIDAE	ヒメグモ科
12.	<i>Anelosimus crassipes</i> (Boes. et Str.)	アシプトヒメグモ
13.	<i>Ariamnes cylindrogaster</i> Simon	オナガグモ
14.	<i>Chrysso venusta</i> (Yaginuma)	コガネヒメグモ
15.	<i>Conopistha fur</i> (Boes. et Str.)	フタオイソウロウグモ
16.	<i>Dipoena mustetina</i> (Simon)	カニミジングモ
17.	<i>Enoplognatha transversifoveata</i> (Boes. et Str.)	カレハヒメグモ
18.	<i>Episinus affinis</i> Boes. et Str.	ヒシガタグモ
19.	<i>E. nubilus</i> Yaginuma	ムラクモヒシガタグモ
20.	<i>Phoroncidia pilula</i> (Karsch)	ツクネグモ
21.	<i>Rhomphaea sagana</i> (Doen. et Str.)	ヤリグモ

KISHIDAIA No39 1975, Mar.

22 <i>Stemmops nipponicus</i> Yaginuma	スネグロオチバヒメグモ
23. <i>Theridion angulithorax</i> Boes. et Str.	ツリガネヒメグモ
24. <i>T. chikunii</i> Yaginuma	バラギヒメグモ
25. <i>T. japonicum</i> Boes. et Str.	ヒメグモ
26. <i>T. octomaculatum</i> Boes. et Str.	ヤホシヒメグモ
27. <i>T. latifolium</i> Yaginuma	ヒロハヒメグモ
28. <i>T. sterninotatum</i> Boes. et Str.	ムナボシヒメグモ
29. <i>T. tepidariorum</i> C. Koch	オオヒメグモ
V NESTICIDAE	
30. <i>Nesticus brevipes</i> Yaginuma	ホラヒメグモ科
X LINYPHIIDAE	
31. <i>Doenitzius peniculus</i> Oi	デニッサラグモ
32. <i>Arcuphantes fujiensis</i> Yaginuma	フジヤミサラグモ
33. <i>A tamaensis</i> (Oi)	タマヤミサラグモ
34. <i>Labulla contortipes</i> (Karsch)	アショレグモ
35. <i>Linyphia oidedicata</i> (Helsdingen)	ヘリジロサラグモ
36. <i>Prolinyphia limbatinella</i> (Boes. et Str.)	フタスジサラグモ
37. <i>P. longipedella</i> (Boes. et Str.)	アシナガサラグモ
38. <i>P. yunohamensis</i> (Boes. et Str.)	ユノハマサラグモ
X MICRYPHANTIDAE コサラグモ科	
39. <i>Asperthorax communis</i> Oi	ザラアカムネグモ
40. <i>Nematogmus stylitus</i> (Boes. et Str.)	スダカサラグモ
41. <i>N. rutilus</i> Oi	コアカサナダグモ
42. <i>Strandella quadrimaculata</i> (Uyemura)	ヨツボシアカムネグモ
X MIMETIDAE センショウグモ科	
43. <i>Ero japonica</i> Boes. et Str.	センショウグモ
X ARGIOPIDAE コガネグモ科	
44. <i>Acusilas coccineus</i> Simon	ハツリグモ
45. <i>Araneus fuscocoloratus</i> Boes. et Str.	ヤミイロオニグモ
46. <i>A. ishikawai</i> Kishida	イシサワオニグモ
47. <i>A. uyemurai</i> Yaginuma	ヤマオニグモ
48. <i>A. ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
49. <i>A. mitificus</i> (Simon)	ビジョオニグモ
50. <i>A. pentagrammicus</i> (Karsch)	アオオニグモ
51. <i>A. cucurbitinus</i> Clerck	ハナオニグモ

52	<i>A. displicatus</i>	Henty	ムツボシオニグモ
53.	<i>A. variegatus</i>	Yaginuma	ニシキオニグモ
54.	<i>Neoscona scylla</i>	(Karsch)	ヤマシロオニグモ
55.	<i>Hypsosinga sanguinea</i>	C. Koch	シロスジショウジョウグモ
56.	<i>Zilla astridae</i>	(Strand)	サガオニグモ
57.	<i>Z. sachalinensis</i>	(Saito)	カラフトオニグモ
58.	<i>Argiope minuta</i>	Karsch	コガタコガネグモ
59.	<i>Chorizopes nipponicus</i>	Yaginuma	ヤマトカナエグモ
60.	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	Boes. et Str.	ギンメッキゴミグモ
61.	<i>C. monticola</i>	Boes. et Str.	ヤマゴミグモ
62.	<i>C. octotuberculata</i>	Karsch	ゴミグモ
63.	<i>C. sedeculata</i>	Karsch	ヨツデゴミグモ
64.	<i>Meta kompirensis</i>	Boes. et Str.	タニマノドヨウグモ
65.	<i>M. seticuloides</i>	Yaginuma	ヤマジドヨウグモ
66.	<i>M. yunohamaensis</i>	Boes. et Str.	メガネドヨウグモ
67.	<i>Nephila clavata</i>	L. Koch	ジョロウグモ

XIII THERIDIOSOMATIDAE カラカラグモ科

68.	<i>Theridiosoma epeiroides</i>	Boes. et Str.	カラカラグモ
-----	--------------------------------	---------------	--------

XV TETRAGNATHIDAE アシナガグモ科

69.	<i>Leucauge magnifica</i>	Yaginuma	オオシロカネグモ
70.	<i>L. subblanda</i>	Boes. et Str.	コシロカネグモ
71.	<i>L. subgemmea</i>	Boes. et Str.	キララシロカネグモ
72.	<i>Tetragnatha praedonia</i>	L. Koch	アシナガグモ

XV UROCTEIDAE ヒラタグモ科

73.	<i>Uroctea compactilis</i>	L. Koch	ヒラタグモ
-----	----------------------------	---------	-------

XVI ARGYRONETIDAE ミズグモ科

74.	<i>Cybaeus nipponicus</i>	(Uyemura)	カチドキナミハグモ
-----	---------------------------	-----------	-----------

XVII AGELENIDAE タナグモ科

75.	<i>Agelena limbata</i>	Thorell	クサグモ
76.	<i>A. opulenta</i>	L. Koch	コクサグモ
77.	<i>Cicurina troglodytes</i>	Yaginuma	ホラコタナグモ
78.	<i>Coelotes decolor</i>	Nishikawa	ウスイロヤチグモ
79.	<i>C. exitialis</i>	L. Koch	ヤチグモ
80.	<i>C. hamamurai</i>	Yaginuma	フタバヤチグモ
81.	<i>C. insidiosus</i>	L. Koch	シモフリヤチグモ

82 <i>C. kitazawai</i> Yaginuma	アズマヤチグモ
83 <i>C. modestus</i> Simon	ヤマヤチグモ
XVII HAHNIIDAE	ハタケグモ科
84 <i>Hahnia corticicola</i> Boes. et Str.	ハタケグモ
XIX PISAURIDAE	キシダグモ科
85 <i>Dolomedes hercules</i> Boes. et Str.	スジボケハシリグモ
86 <i>D. raptor</i> Boes. et Str.	アオグロハシリグモ
87 <i>D. saganus</i> Boes. et Str.	ズジアカハシリグモ
88 <i>D. sulfureus</i> L. Koch	イオウイロハシリグモ
89 <i>Pisaura lama</i> Boes. et Str.	アズマキシタグモ
XX LYCOSIDAE	コモリグモ科
90 <i>Lycosa pseudoannulata</i> (Boes. et Str.)	キクズキコモリグモ
91 <i>Pardosa T-insignita</i> (Boes. et Str.)	ウヅキコモリグモ
92 <i>Pirata subpiraticus</i> (Boes. et Str.)	キバラコモリグモ
93 <i>Tricca japonica</i> Simon	ヒノマルコモリグモ
XXI THOMISIDAE	カニグモ科
94 <i>Misumenops japonicus</i> (Boes. et Str.)	コハナグモ
95 <i>M. tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ
96 <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ
97 <i>Philodromus auricomus</i> L. Koch	キンイロエビグモ
98 <i>P. flavidus</i> Saito	キエビグモ
99 <i>Pisticus truncatus</i> (Pallas)	ガザミグモ
100 <i>Thomisus labefactus</i> Karsch	アズチグモ
101 <i>Tibellus tenellus</i> (L. Koch)	シャコグモ
102 <i>Tmarus piger</i> (Walckenaer)	トラフカニグモ
103 <i>Xysticus croceus</i> Fox	ヤミイロカニグモ
104 <i>X. ephippiatus</i> Simon	シナカニグモ
XXII SALTICIDAE	ハエトリグモ科
105 <i>Boethus sexdentatus</i> Yaginuma	ムツバハエトリ
106 <i>Evarcha albaria</i> (L. Koch)	マミジロハエトリ
107 <i>Hasarius adansoni</i> (Audouin)	アダンソンハエトリ
108 <i>H. doenitzi</i> Karsch	デーニッツハエトリ
109 <i>Marpissa elongata</i> (Karsch)	ヤハズハエトリ
110 <i>M. magister</i> (Karsch)	オスクロハエトリ
111 <i>Menemerus pullus</i> (Karsch)	ヨダンハエトリ

112	<i>Myrmarachne japonica</i> (Karsch)	アリグモ
113.	<i>Pellenes ussudi</i> Yaginuma	ウススジハエトリ
114.	<i>Dendryphantes atrata</i> (Karsch)	カラスハエトリ
	XXII CLUBINIDAE	フクログモ科
115.	<i>Chiracanthium eutitttha</i> Boes. et Str.	アシナガコマテグモ
116.	<i>C. unicum</i> Boes. et Str.	ヤサコマチグモ
117.	<i>Clubionis jucunda</i> (Karsch)	ヤハズフクログモ
118.	<i>C. lena</i> Boes. et Str.	トビイロフクログモ
119.	<i>C. vigil</i> Karsch	ムナアカフクログモ
120.	<i>Itatsina praticola</i> (Boes. et Str.)	イタチグモ
121.	<i>Phrurolithus pennatus</i> Yaginuma	ヤバネウラシマグモ
	XXIII ANYPHAENIDAE	イズツグモ科
122	<i>Anyphaena pugil</i> Karsch	イズツグモ
	XXIV HETEROPODIDAE	アシダカグモ科
123.	<i>Heteropoda forcipata</i> (Karsch)	コアシダカグモ
	XXV CTENIDAE	シボグモ科
124.	<i>Anahita fauna</i> Karsch	シボグモ
	XXVI GNAPHOSIDAE	ワシグモ科
125.	<i>Poecilochroa hosiziro</i> Yaginuma	ホシジロトンビグモ
126.	<i>Zelotes cavalerier</i> Schenkel	タイリクケムリグモ

5. 主な種の解説

(1) *Antrodiaetus roretzi* カネコトタテグモ

冬期、雄雌各一頭がガレ場で採集された。ガケ地に横穴式住居がいくらかみられたが蜘蛛は、いなかった。雄は引っくり返した石の裏に、長さ3cmほどの袋状住居を作つて越冬していた。

(2) *Ischnothyreus na ratomii* ナルトミダニグモ

本州以南に広く分布し、リター中や石の下に棲息している。体長約2mmで腹部背面のキチン板は黄褐色で同定は容易である。冬期、サレ場で数10cmも地中にもぐっている。

(3) *Spermophora akebona* アケボノニウレイグモ

東京・日原鐘乳洞で最初に見つかった種¹、最近関東各地で採集されており、山間部に広く分布するものと思われる。箱根においては、岩の隙間れ目やうす暗い、かなり湿った場所で採集されている。

(4) *Nesticus brevipes* コホラヒメグモ

短肢型の *Nesticus* で各地の洞穴内キーリター中から知られている。野外で *Nesticus* を採集するには、うす暗い、湿った場所で直² 疾土に接していない石や朽ち木の裏を捜すと良い。

個体数はあまり多くない。

(5) *Coclotes decolor* ウスイロヤチグモ

近畿地方を中心(岐阜県、鳥取県、愛媛県等)に分布している。名の示す通り、体色が薄い。
Coclotes 属の中では、*C. hamamurai* と共により良い(暗く、湿った、深い)環境に棲息している。

(6) *Coclotes kitazawai* アズマヤチグモ

個体数は非常に多い。体長の変異は6~12mmと大きい。関東に広く分布している。

(7) *Zelotes cavalerier* タイリクケムリグモ

中華人民共和国から報告のあった種で、日本では秋田と箱根にそれぞれ1回採集されているだけである。

6. 参考文献

- 岸田久吉 (1928) 蜘蛛類(真正蜘蛛目) 富士の動物 富士の研究 古今書院
西川喜朗 (1973) 日本産 *Coclotes* (ヤチグモ属) の2新種 追手門大紀要(7): 75-81
Oi, R., (1960) Linyphiid Spiders of Japan J. Inst. Palv. tech. Osaka City Univ. D-11 pp. 137-244 pls. 1-26
八木沼健夫 (1968) 原色日本蜘蛛類大図鑑 保育社
—— (1970) 日本の真正蜘蛛類相 国立科学博物館専報 1 (4): 639-701
—— (1971) 日本の真正蜘蛛類相 (II) 追手門大紀要 (5): 161-175
—— (1971) 富士山の真正蜘蛛類(予報) 富士山・富士急行KK pp. 1018-1021
Yaginuma, T., (1972) The fauna of the lava caves around Mt. Fuji-san. IX. Araneae (Arachnida). Bull. Natn. Sci. Mus. (15): 267-334
八木沼健夫・西川喜朗 (1973) 富士山の蜘蛛 富士山西麓面学術調査報告書 pp. 120-147
山川守・態田憲一 (1973) 丹沢山塊の真正蜘蛛類 Atypus. (6): 31-54

KISHIDAIA №. 40 原稿募集

KISHIDAIA 次号は、早ければ(=原稿が集まれば)予算のゆるす限り今秋にも発行の予定です。ふるって原稿をお送り下さい。解説、目録、観察記録、紀行文、随想などクモに関する事でしたら何でも気軽に投稿して下さい。詳しくは38号の投稿規定参照。

談話会通信の方は1~2カ月に1回発行されます。感想、情報、質問等のお便りをどしどしお寄せ下さい。

受付は下記の通りです。

談話会通信原稿受付 : 〒192 八王子市宮下町476 杏林大学内 松本誠治方
KISHIDAIA原稿受付 : 〒211 川崎市中原区 小杉町1-540 小野辰嗣方

クモの生活史研究の問題点及び齢期記録の一方法

小野展嗣

クモの採集に適した時季は多くの種の成体が出現する夏期であると言われている。これを裏がえせば、他の時期には幼生が多いので同定がむずかしい、即ち、クモの分類はほとんど成体だけに基いて行なわれているので、幼生の標本での同定には危険がともなり、ということになる。事実、初期の幼生では種はおろか属の判別すら不可能な場合がある。しかし、ファウナや生態などの調査において、成体だけでなく幼生でも正確に同定されることが極めて重要であることは言うまでもない。にもかかわらず、現時点でのクモの幼生の同定は熟練した研究者の経験によっているのである。筆者はクモの幼生が軽視されがちな現状にかねて疑問を持ってきた。幼生が軽視されるということは、すなわち生活史研究の立遅れによるものである。実際、クモの生活史の解明は全くと言っていいほど行なわれていない。身近かにいるクモですら何回脱皮するかというようなこともわかっていないのである。種というものは一匹のアルコール漬けの死骸ではなく、時間とともに成長し世代をくり返す生物個体群の動態であるという認識をもっと強くもつ必要があると思う。多足類において様原（1974）が指摘した「採集に時期は必要か」という問題点は、とりもなおさずクモにおいても同様の疑問をなげかけ得るものである。そこで思いつくままに生活史研究におけるいくつかの問題点を並べ、最後に齢期記録の一つの方法を紹介したいと思う。

亜成体という用語はあまり意味をもたない

クモの発育段階は、成長に従って卵→幼生→亜成体→成体という風に一般に表わされている。しかし、それぞれの発育段階はクモ学においては明確に定義されていないし、またあまり問題にもされていないようである。このことがクモの生活史がなかなか解明されない原因の一つをなしている気がする。発育段階、特に幼生か亜成体かの判定は各々の研究者の経験或は勘によっているのが現状である。ところで卵、幼生、成体に異議はないとして、亜成体という用語ははたして適切だろうか。

幼生と成体で性的成熟以外に形態的変化があまりないという点で成長の過程がクモと似ている無翅亜綱 (*Apterygota*) の昆虫においても亜成虫 (*subimago*, *subadult*) という観念はないようである。昆虫学で亜成虫と言った場合は、蜉蝣目 (*Ephemeroptera*) の水中生活をしていた幼虫が脱皮して空中生活の形態になったものを示す。これは羽があっても眞の成虫ではなく、もう一度脱皮し生殖能力を有する成虫となるのである。クモ学でいう亜成体 (*subadult*) がそれと同義語でないにしても、昆虫学における亜成虫ほど意味のある言葉とは思えない。クモの生活史をみていると、孵化幼生と2齢幼生の形態的、生理的相異の方が、幼生と亜成体のそれよりはるかに大きい。

次にクモ学における亜成体が一体何を示すかという問題である。亜成体という用語を明確に定義した文献を見ないのでもし仮に定義してみると、「成体直前の齢期」というのが妥当かと思われる。従来の同定者は体の大きさや、さらには触肢のふくらみ具合で亜成体か幼生かを判別してきた。しかし、ジョロウグモなどで体の大きさにかなりの変異幅のあることがわかっているし、いろいろなクモを飼

育していると、例えば次頁に図示したように、ヤミイロカニグモ (*Xysticus croceus* Fox.) の終齢幼生の触肢は、中期以後図 1→3 のように漸次変化し脱皮して図 4 のような成体となる。この場合図 2 や 3 の時期には表皮の内側に成体の毛や触肢器官の一部が見えてるので、亞成体であることは一目瞭然であるが、終齢幼生でも初期の触肢のふくらみ具合ではその前の齢期の幼生との区別は今のところ困難である。「成体の器官が表皮の内側に見える」のを亞成体とした方がむしろよさそうである。従ってその判定は安易に行われるべきではない。従来の判定に対しても一抹の疑問を感じることを否めない。幼生か亞成体かの判定は生活史が解明されそれぞれの齢期の変異幅なり特徴なりが把握されて初めて行なわれるべきものであろう。

以上のように考えた結果、乱暴なようだがクモ学においては無用な混乱や誤定を避けるためにこの不安定な亞成体なる語をいっそ用いない方が良い。成体まではすべて幼生と呼び、その発育段階は卵から孵化したてのものを初齢幼生（孵化幼生、1 令幼生）、1 回脱皮したものを 2 令幼生、2 回脱皮したものを 3 齢幼生というように齢数で示し、成体直前の齢期も同様に終齢幼生と表わすのが適当かと思われる。成体器官が表皮の内側に見える終齢幼生を強いて区別するなら老熟幼生と呼びたい。

とはいひ日本産真正蜘蛛類全 890 種の 99 % 以上が生活史不明という現状からして齢期の判定はほとんど不可能である。そこでファウナや生態の調査などで幼生標本を同定、記録する場合は少なくとも採集地、年月日とともにその個体の背甲長や幅（体長は不適）、或は脚長などのよりどころとなる特徴を同時に記載する必要がある。そうしておけば後にその種の生活史が解明された場合、何齢であったかを推定することが可能となる。

クモの飼育は困難な作業か

それよりも、幼生のクモを採集した時は何とか成体に至るまで飼育したいものだ。といってもクモの飼育はなかなか根気のいる作業である。なぜならたくさん一ぺんに集めるとともぐいをするし、エサも生きた昆虫でなくてはならず貯蔵もきかない。また種類によっては管びんなどでは簡単に飼育できず、生活している所と同じ環境をつくってやらなければならないこともある。この飼育のむずかしさがクモの生活史研究が遅れている技術的な最大の問題点であろうと思われる。特にたくさんの個体を卵から成体に至るまで継続して飼育することは時間と労力の点からなかなか実行されない。しかし、そのことは決してむずかしい仕事ではなく、また生活史を解明する上では野外観察と平行してどうしても行なわれなければならないのである。図鑑出版以来日本各地に多くのクモの研究者が輩出したにもかかわらず、多くは単なるリストメーカーで終ってしまい、それぞれのクモ自体の生態や生活史に

Xysticus croceus Fox の触肢

Fig. 1 : 終齢幼生中期、中央部わずかに突出する。

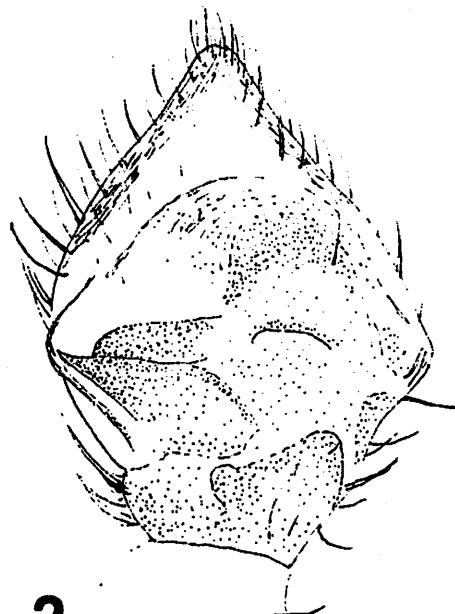
- 2 : " 後期、表皮の内側に成体の毛がつくられ、触肢器官がやや鮮明になる。
- 3 : " 脱皮直前、成体の器官がかなりはっきり見える。
- 4 : 成体

Fig. 1 以前では、その前の齢期の幼生との区別が困難である。



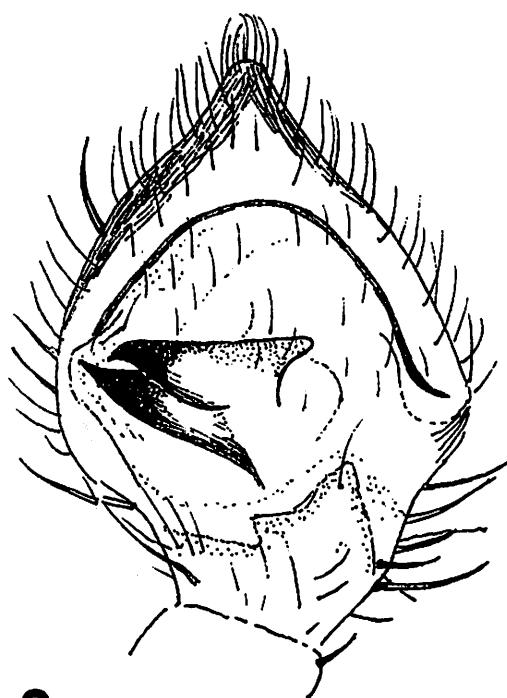
1

0.2 mm



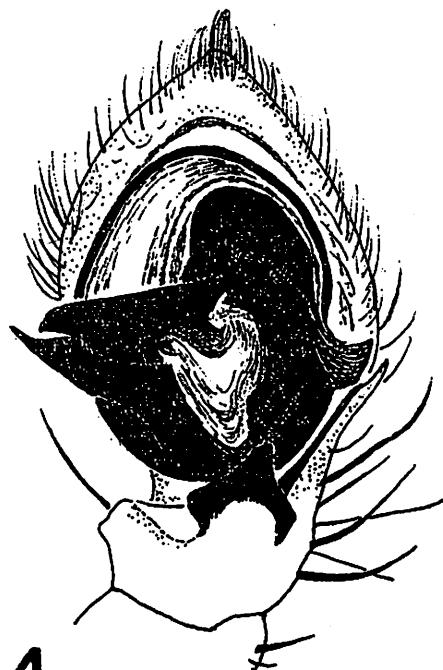
2

0.2 mm



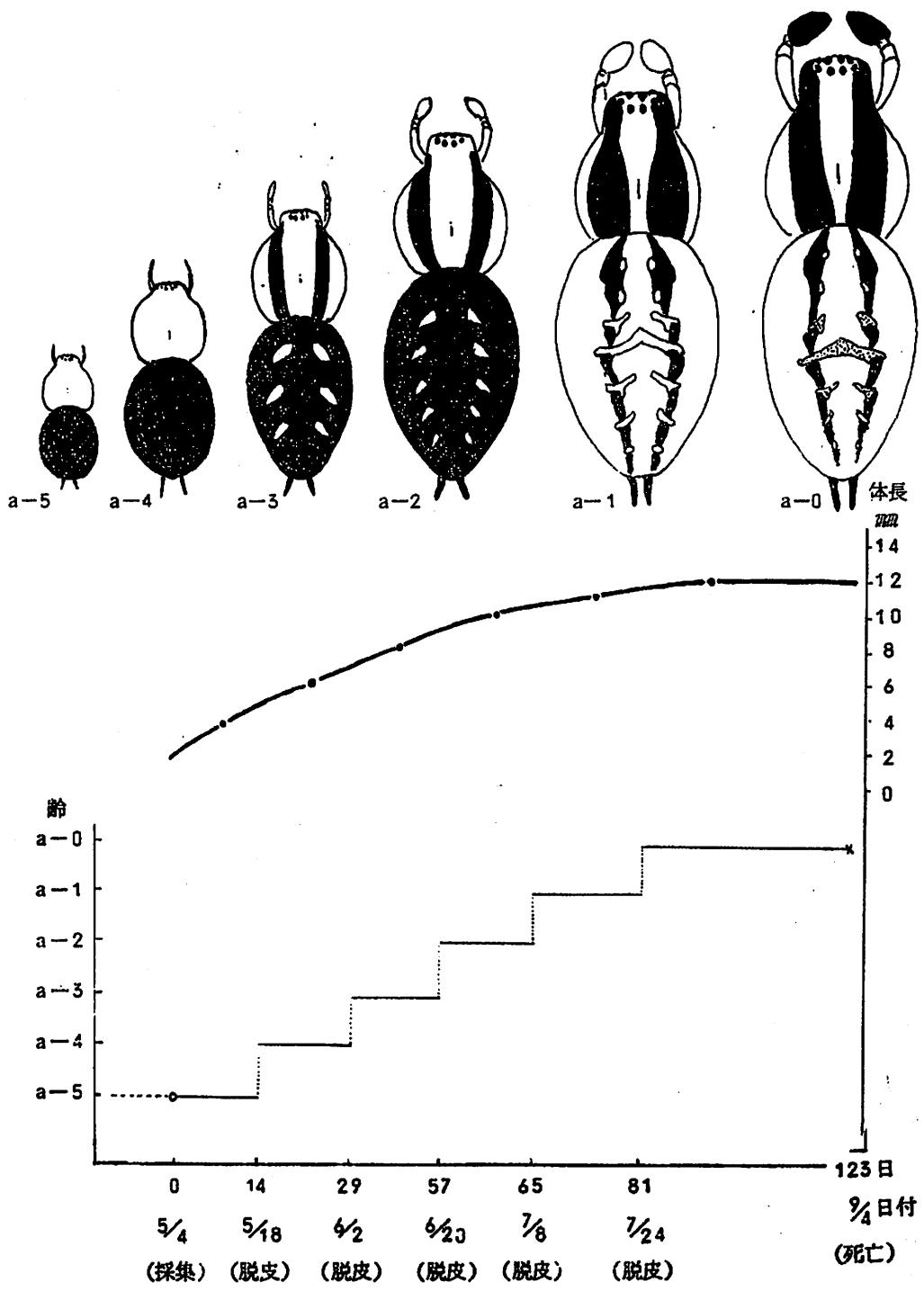
3

0.2 mm



4

0.2 mm



クサグモ 1♂ の飼育記録

あまり目が向けられなかつた。従つて、おそらく、生活史解明の立遅れも我々クモ研究者自身に責任があるのだろう。ところが、生活史の貴重な記録が、報告されずに各研究者の蔵の中に温存されているように思われてならない。前述したように、クモの生活史を卵から成体まで追いつけることはなかなか容易にはいかないけれども、多くの研究者の断片的な観察記録や飼育記録を寄せ集めればそのおよそその輪郭ぐらいは何か浮き出させることができるのでないだろうか。

クモの齢期表現の一方法

「採集してきたクモの幼生を飼育したところ何回か脱皮して成体となつた。」というデータは多くの研究者が持つてゐると思う。しかし、それが報告された例をあまり見ない。こうした埋もれてしまつ小さな飼育記録を何とか記録にとどめておきたいと思い、ここにクモの齢期を記載する場合の一つの方法を紹介したい。それは一言でまとめてしまえばマイナス齢期記載法とでも言ひ得るものである。即ち齢を成体から逆に数えるのである。成体を $a - 0$ 齢 ($a - 0 = \text{adult}$) として、それより一つ前の齢期は $a - 1$ 齢、もう一つ前は $a - 2$ 齢、…………、と表わす。

例えば、あるクモの幼生を採集してきて飼育したところ5回脱皮して成体になつたとする。これを上のマイナス齢期で表わせば採集時は $a - 5$ 齢であったことがわかる。その際、それぞれの齢期の斑紋や色彩或は脱殻の大きさなどを記録しておく。こういった飼育例を多く横み重ねることによってより正確にその実体をつかむことができ、そのクモの $a - 5$ 齢までがおよそ確認されることになる。さて、今度は別の機会に違う人がそれと同種のクモを卵から飼育したところ2回脱皮して3歳になつた幼生がすでに報告されているそのクモの $a - 5$ 齢と特徴が一致した。そこで、このクモは大体7回脱皮し、7歳の幼生期を経て成体に達することがわかる訳である。

脱皮回数は一定でない

しかし、千国(1941)がジョロウグモの生活史に関する報文の中ですでに示唆しているように成体に達するまでの脱皮回数は必ずしも一定ではない。福島・宮藤(1970)は「ハナグモの生活史および習性」の中でこのことを飼育実験によって確かめられている。それによると、ハナグモの脱皮回数はおむね6回だが、5回から9回までの変化があり、回数は 30°C の温度条件より 25°C のものの方がやや多く、雄より雌の方が多くなる傾向があるという。また、筆者が飼育したシャコグモの♀が成体でありながら脱皮した例(未発表)もあり、脱皮回数の問題は簡単なようで実は複雑な要素を含んでいる。しかし、その回数に一定の範囲があることは確かに、個体による脱皮回数の違いがどのような原因によって起こるのか、という興味深い問題点が生じてくる。とにかくわずかな飼育記録でそれを判断することは危険である。従つて、生活史を把握するためには多くの飼育記録を横み重ねなければならないのである。

クサグモ *Agelenopsis limbata* Thorell 1♂の飼育記録

ここにたたき台のつもりで、筆者がクモの研究を始めたばかりの頃(8年前)の記録帳からクサグモの1♂の一飼育経過を例示したい。(図及びグラフ参照)

埼玉県鎌北湖近くで1967年5月4日に採集した1幼生を飼育したところ5回の脱皮をくり返して成体の1♂となつた。飼育は管びんを用いて行ないエサにはショウジョウバエやイエバエを与えた。

KISHIDAIA No.39 1975, Mar.

この飼育経過で見る限り、クサグモは a-4 齢までは背甲（赤褐色）、腹部（黒褐色、光沢あり）とともに斑紋はなく a-3 齢で初めて背甲には黒褐色の対斑が腹部には 3 対のやはず状の白色斑が現れる。腹部のやはず状斑は a-2 齢になると 5 対に増える。a-1 齢になると色彩、斑紋ともに成体に近づき、特に腹部の斑紋は複雑になり、地色は淡褐色となる。触肢は a-2 齢で初めてふくらみさであると判別できた。

というような事実がわかってきたが、1例のみの記録なので、今後多くの個体で確かめたいと思っている。

以上かなり思い切って述べてきたつもりであるが、見当違いも多々あるかと思う。諸兄の御批正を乞う次第である。

引用文献

- 千国安之輔 (1941) 脱皮を中心とするジョロウグモの一生. *Acta Arachnol.*, 6(1): 1-9
福島正三・宮藤守雄 (1970) ハナグモの生活史および習性. 北日本病虫研報, (21): 5-12
篠原圭三郎 (1974) 多足類の群集調査をしてみて. *Takakuwaiia*, (7): 1-3

〔紹介〕

先日、水野寿彦先生の「日常の生態学」という本を読みましたが、なかなか興味深い本でしたのでここに紹介しておきます。これは著者の研究や体験を交じえて、日常よくみかける動植物（主に昆虫・小動物など）の生態を分かりやすく説明したもので、生態学が我々の日常生活に直結したることを読者に強く感じさせます。また、今日の自然環境の破壊や人口増加が将来の人間生活にもたらす影響を懸念し、人間も自然の動植物と同じ生態系の一員である事を強調しています。身近な動植物を取り扱っている点でたいへん読み易く、一般向けの生態学入門書として適当な本だと思われます。

もう一つ紹介しておきたいものがあります。今度は「化学と生物」という専門雑誌ですが、この雑誌の Vol. 11、No. 7 に「クモの糸」という題目で、クモの各糸腺中に含まれる液状物質の化学成分についての研究が記載されています。既に御存知の方もおられるかもしれません。

紹介したものは下記のものです。

- ・水野寿彦著「日常の生態学」築地書館、1972年、990円
- ・「化学と生物」東京大学出版会 Vol. 11、No. 7、p. 451~456 「クモの糸」徳武哲氏。
(佐久間良三)

~~~~~会報~~~~~

◎第38正誤

頁	行	誤	正
2	-3	層雲峠	昇仙峠
8	-9	Nesticus	Nesticus
14	-11	会員	会費

◎編集からのお願い

本誌の投稿規定は第38の通りですが、2、3追加すべき事が生じたのでよろしく御協力をお願い致します。

- ・学名は*Kishidaiia albimaculata* (Saito) のように表わし、リストなどで同じ場のものが続くときには2番目以下の種類の属名はK. というように略して下さい。なお学名(属・種名)の下には赤線を引いて下さい。
- ・今回から図のみオフセット印刷が可能となりました。この場合も図は1頁の出来上り原寸大(14×21cm)に完成して下さるようお願いします。なおオフセット頁の印刷代超過分は実費をいただきます。
- ・別刷を御希望の方は原稿第1頁に必要部数及び表紙の要不要を必ず明記して下さい。
- ・一論文6頁までとし、超過頁は実費著者負担とします。

編集後記

昨年5月に38号が出て以来暮れ至るまで全く原稿がなく、39号の発行は半ばあきらめの状態でしたが、八木沼先生に起爆薬となるような原稿をお願いしたり、例会で投稿を呼びかけたりした甲斐あって、今年に入るとまもなく談話会史上空前の原稿ラッシュとなりました。おかげでこちらは大忙になりましたが、談話会の活動が下火になった訳ではなく、ましてや編集の責任などではなかったのではっとした次第です。この調子でよろしくお願いします。

編集の至らないところは、それぞれの論文の内容で充分満足していただけるものと信じています。
いろいろお世話をなっている竜虎両雄にお礼申し上げます。

KISHIDAIIA No.39 1975年3月30日印刷 編集者 小野民國
 1975年3月31日発行 発行者 萩嶋 泉
 発行所 東京蜘蛛談話会
 T 191 東京都日野市豊田1896 整頓 泉方
 PHONE 0425(81)7128

印刷所 東京都島根区日白2丁目14-2 小山タイブ